毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治二十九年二月十日發兌

第七拾壹號

「日本の家庭」の好評ますます天下に高し

日本の家庭

「日本の家庭」は月一回發行の家庭の雜誌也其說くところ適切にして書生の空論に非ず又多くの面白くおかしき記事は能く家庭の和樂を増す且每號優美なる繪數多有

☞第三號（二月一日發行）要目

口繪 小女眺望庭園 挿繪 盲啞學校内の圖 其他面白くおかしき繪數多有 ◎小說挿繪

（社說）勤め勵け（論說）棚橋絢子氏の家庭の談話◎昔話につきて篠田利英（はなし）けびやう◎慈善外道◎鼻切（小說）寒稽古（江見水蔭）◎罪ほろぼし（江上霧影）◎（敎育）靜かに論せ外に二つ（たのしみ）あまいだ圓◎歌舞妓狂言穴さがし◎笑ひぐさ（雜錄）東京盲啞學校參觀（◎盲啞の原因◎敎育◎親族結婚の大害）（靑々園）浪路の女匣（其外）衞生家事

雜報の諸欄に有益にして面白き事多し

一冊價六錢五厘郵稅五厘半年分郵稅共四十一錢一年分全八十錢爲替向所飯田町局◎郵券代用（五厘切手）一割增

發行所 東京市麴町區富士見町二丁目三十七番地 日本の家庭社

◎速記法自宅獨習生募集 月謝二十錢 二ヶ月卒業

規則書入用ノ者ハ郵券二錢ヲ投ズベシ

東京下谷區徒町二丁目卅一番地 速記學專修所

◎德富健次郎著 近世歐米 歷史の片影 定價二十錢 郵稅四錢

◎征淸壯烈談 定價十三錢 郵稅二錢

◎第二征淸壯烈談 定價十二錢 郵稅二錢

發兌元 東京々橋區日吉町 民友社

コールダー氏著 水野忠丸氏譯

慈善美談

並製價廿二錢 上製肖像入價卅錢 三百六十頁餘

本書は彼の牢獄改良率先者として電名を第十九世紀の前半記に轟かしたるエリサベスフライ夫人の來歷及其事業を記述せるものにして氏が華美の社會に成長せしも一朝眞理の光輝の心を射るや斷然俗情を脫して靈界に入り全躰を捧げて主に事へ内にして良妻賢母となり外にしては貧民罪徒の師母となり一擧手一投足も未だ曾て神意に則らずといふことなく一は以て基督敎徒たるもの丶摸範となり一は以て婦女たるもの丶龜鑑たるは最も世人の知るところなり

發賣 東京市新橋出雲町一番地 警醒社書店

家庭叢書全部拾貳册

六版	第一巻	家庭の和樂
四版	第二巻	夏の家庭
三版	第三巻	玩具と遊戯
四版	第四巻	家庭教育
三版	第五巻	小兒養育
三版	第六巻	家庭衛生
再版	第七巻	家政整理
初版	第八巻	簡易料理
三版	第九巻	社交一斑
初版	第十巻	婦人と職業
初版	號外	家庭理財
初版	號外	名士と家庭

定價各拾錢郵税各貳錢

塚越芳太郎著

近松著作一斑

紙數五百拾頁　定價三十五錢　郵税八錢

◎經濟雜誌曰く　此巻には近松の史劇曲を評釋したり、停雲樓主人の批評眼例に依て深刻なり　◎東京朝日曰く　曩に近松門左衛門を著して世の喝采を博したる塚越芳太郎氏の著にして近松著作の類別より戯曲の躰、戯曲の想、戯曲の効果並に史戯曲の事に至るまでを本巻に擧りたり氏の前著は單に近松が生涯思想等に就て大綱を擧げしに過ぎず本書は之を補ふが爲め其著作一斑を細説せるものにして兩者相俟つて始めて完全無缺を得るものなり近來文學上の著作多しと雖も本書の如く考察調査の精を究むるものあらず實に文壇必須の著にして近松亦た地下に知己を得たるを謝するならん—◎大坂朝日曰く『近松門左衛門』の著者停雲樓主人塚越芳太郎氏與林子が著作に就て前著僅かに簡單なる解題を施せるに止めたるを此には其細を極め精を盡して研究の手眼を示せり而して尚題して一斑といふもの蓋し謙也今上巻を出す其體裁先づ著作の類別、戯曲の體、其進步、其想、其開展、戯曲の効果等に就て堅說横說、發揮餘蘊なし次に其史戯曲中の雪女、追節、會稽山、蟬丸の四篇を解剖し之を析ちて微に入り原作の神氣躍然たり近來與林子の著作を把りて其解題、批評等を公にせしもの世に其人多し然れども皆片鱗甲のみ未だ全體の大に亘りて之を研究せしものあらず後者既に前著に於て與林子の人を傳し今又此六若解釋あり下巻の完成を見んと樂しむ意想を敍ふに此盛著に對讀すべきものの未だ之あらず豈一大快事ならずや著者其れ餘力之を成せ

發兌元　東京市京橋區日吉町　民友社

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿九年二月十日發行
家庭雜誌第七拾壹號

目録



家庭雜誌第七拾壹號

（明治廿九年二月十日發兌）

社說

他人を世話するに就きて

世には好んで人の世話を爲しながら、己れも亦一生他人の厄介となる者あり。此流の人は他人の家のとなれば障子も張り、水も汲めども我が家の事は箸片し動かさぬを常とす。こは世間にかまはず唯我が事をのみ勉むる徒に比すれば、幾分かまさる樣なれども、結局他人に厄介を掛けるやうにてはつまり人間の美德なりと云ふべからず。

されば人の世話を爲すと共に善く自から修めて他人の世話にならぬやう心掛くべきことなり。他人の世話をする代りに他人より世話せらるゝは當然なりなど云ふ理屈をつけて、己が身を持ちくづすことあるべからず。他人の磊落は何處までも恕して朋友の誼を悉すと共に、己れは謹敕にして一身を修むべきことなり。一錢と雖も他人の懷中を損すまじと心掛け、平生儉約を常とし、扨朋友の難儀に遇へば己れが財を傾けて之を救ふの用心あるべし。

生俠心ほど世道に害ある者はなし。宵越の錢を遣はぬは江戸ッ子の氣象なりと云ひて、漫りに金錢を浪費し、一身の計を爲さず、事あれば直ちに朋友の世話になり、互に持ちつ持たれつする其意氣精神は如何にも美事にして所謂貪夫も爲めに廉となるの風あれど、かゝる遊俠の氣風は申さば、手拭を肩にかけて三尺帶をしめたる遊び人の習にして、士君子相待つの道に非ず。各其家道を齊へて互に獨立の體面を備へ、一旦事ある曉に至りて相扶助することこそ士人の道なれ。

我家道を修むるは獨り祖先の祭を奉し妻子眷族を養ふ

が爲めにあらず。我れ一人にても善く家を修めたらんには、爲めに親戚朋友の窮厄を救ふの便あるべければ也。家を爲すは此世の戰に於て籠城すべき砦を作る者なり。我砦にして落ちずんば此世の戰に敗れたる朋友も亦歸する處を失はざるべし。我此家は我と志を同ふする親戚朋友の爲めに築きたる城砦なりと思へば、是非共之を守らざるべからず。さるを互に助くるが道なれば自分の用心は入らぬことなりとて一身の始末をさへつけぬは是れ野武士の援兵の類にて却つて朋友の迷惑となる者なり。

さりながら世間は所謂長し短しにて、自分の用心に善きものは他人の世話をなさず、他人の世話をするものは自分の用心を爲さず、兎角一方に偏し易き者なり。二者孰れを取ると云はゞ勿論己れの用心には疎かなりとも他人の世話をなすものこそ、高潔なる心事を有するものなりと云ふべけれども、かく他人の世話をする程に義心あらば何故に相應なる分別を出して、先づ我身の處置をなさゞるや。其志は善くとも其爲す所にして愚かならば却つて道に害あり、よく／＼分別すべきことなり。

且又一概に言ひ難けれど女性は比較的に公共心乏しきものなれば、專ら自分の家の事をのみ思ひて、自分の家を治むるは即ち朋友の爲めなることを忘るゝ者なきに非ず、平生俠心に富めりと稱せらるゝものゝ家を爲してよりは存外に鄙吝の名を取ることなきにあらず。これは女性の天性に因るに非ず、自然の境遇より公共心の發達せざるが爲めなれば、夫たらん人は善く之を敎育してかゝる心得違なきやうにすべし。若し善く女性の心を開きたらんには、其朋友に對する情合は男性よりも篤きに至るべし。

いかほどの貨財を積みたりとて一生他人の爲めにならねば寶の持くされなり、一生他人の世話を仕通しにし

たればとて己れが身が持てなば世話の仕そこないなり。家の主人たるものは此區別を合點すべきことにこそ。

植物科學

菫々菜

松ヶ枝女

すみれこれ姿小さき一個の花されど都も鄙もをしなべて知らざる人なかるべし愛せざるものなかるべし古人も歌ひぬ外國びとも頌ひたり歷史はこの花のいかに凡ての世紀に尊まれ愛せられしやを語るなり

キリシヤの古代アモン人は花環の正位の花とまで崇めたり古代の詩に「すみれの冠戴けるアセンに住みて」云々の句も見うけられぬロマ人には「すみれの日」なるものありて花もて墓を飾るの風習などもありぬ英國古代の植物學者曾て賞して「人をたのしく正直なる心に導く花」と云へる事もありき誠にすみれは春の女神が地に贈る最も優しく美はしき飾りの一なりいざこの花を説き明かさん

すみれは多年生の草花なり種類の夥しき殆ど百六十餘種に及ぶ主もに北温帶の諸國に生ずるなり種類は多けれど大別すれば花の美はしきに屬する部と香の床しきに屬するとの二種に分つを得べし蝶々花は前者の代表者にて三色すみれの名もあり紫色の小なる花即ち普通のすみれは後者を代表するなり先づ普通のすみれより解剖せん

葉

葉は地下の莖より生ずる長き葉梗に附し各葉梗はその基底にて細き線條ある鱗片の一對に覆はる

葉面を基底にて内部に卷かれ鉤の形をなす開かるれば

その形狀長しと云けんより寧ろ幅廣くなるなり葉梗を結び付くる基底の孔穴は葉面をして心藏形又は腎藏形をなさしむ

葉縁は通常小さく圓く刻まれたる鋸齒狀をなせど此には多くの異同ありて時には五より九までの缺裂に分たるゝを見るともあり

花　序

花莖は中央にて二つの抱花小葉を有し頂きにて反曲するが爲め花を點頭して反倒するなり

ギリシヤの國の昔噺に面白き事を讀みぬ、アトラの娘アポロより逃げて森の中に隱れけるにダイヤナの魔力にてすみれに變ぜられしかば今に至りても猶フェオバに見らるゝをさけて靜かに己が顔を己が葉にて覆ひ居るなりと

花

すみれの花は爾來正花即ち何れの花瓣も皆等しき形狀を有し等しく見ゆるものとして知られたれど近時の學者はこれを不正花として數ふるなり、是れすみれの花は斜なるか或は一方に傾くが故にして五個の花瓣の不同より來るものなり



花瓣は形狀大小色皆異り二對と一個とに分類せらる

この花瓣はすみれ液を製するに用ひられ小兒の下劑に供せらるゝことあり

三色すみれ

三色すみれは蝶々花ともいふ英語の謂はゆる「パンセ

ー」にて佛語の「パンセー」(思慮)なり故にこの花は往々注意深き人親切なる人などにたとひらるゝとあり

根

根は下方に成長して糸の如き無數の鬚根に分派すこの纎根は全躰より云へば多年生のものなれど年々新たまるものなり

> 春の野に
> 咲すさみたるつほ菫
> つみゝつますみ
> 今日も暮らしつ

葉

葉は楕圓形鋸齒狀鈍角形などにして葉柄はかの普通すみれと同性質のものなれど一層大なる鱗片の一對にて基底を覆はる、之を即ち托葉といふ

この葉の脊を碎かれたるものは時に輪癬の妙藥として用ひらるゝとあり

花

幾多の園庭の飾りなるこの花限りなき種々に咲く美くしさ花は明らかに三色を呈すなり花瓣の一は黄色にして二は白く他の二はかの深濃なる紫色即ち虹の七色中の一なるものなり注意して培養すれば花瓣の大きさ十倍せしむるを得べくこの三種の原色も次第に妙趣ある色に變更せしむるを得るなり

花瓣の形狀悉く同じき間は必ずその色も亦皆同じされど一度ある必要なる目的に驅られて一片の花瓣その形ちを大ならしむるや色の變化次て起るなり

下部に當る花瓣は昆虫を招くの地位を保ち花の色一層美はし昆虫こゝより直ちに內部の花蜜を探るが故花粉を撒き散らすに妙なり

花には我等の目に觸るゝ美はしきもの多くあれば又少し異りたる花もあるものなり

「自然」は最たる經濟家なる故時には浪費する如きとあるやに見ゆれど時には最も節儉なるものにて何れも道理ありて然するなり

花粉は昆虫にまき散され或は風に吹き散らさるゝ時は遠近に播ると共に無數の花粉は空しく浪費に歸するとありさるが故時として花に開かざる花といふものありこれ閉ぢられたる花の中に花粉閉ぢ込めあればさまで多くの花粉を要せざるが故なり

かゝる場合には昆虫の扶けを要せざるが故に從て花は昆虫の目を惹くべき長き花莖を有せじ色もなく香もなく蜜もなく實に花瓣すら有せざるなり然れども猶所謂花と呼ばるゝ花よりも一層多くの種子を生ずる事あり

宇宙の萬物觀じ來れば實に一本の花の中にも亦献身的のものを見出すとあるものなり

獨逸のハーズといふ高山にすみれ石と稱せらるゝものありこれその石すみれ苔と稱する苔にて覆はれ恰もすみれの如き妙香のするを以てこの名あるなりとこの香長く續きて濕せば一層香を增すといふすみれ苔は單なる連結せる鬚より成り優美なる風趣もて石の上を覆ふなり始めは赤褐色なれど漸次黄かゝりたる緣と變ずるなり

熱症の皮膚の發疹に妙功ありとて曾て外國にて用ひられし事あり

出でよ出でよ野に出でよ美はしきこの花その
優しの姿もて野の雜草の間に慢ぶらず咲き出
るは遠きにあらざるべし摘み取れこの花を優
美謙遜のその姿深き敎へを垂るゝなり

富貴を戒む

顯名の人には挫ぎ辱るの僻あり高位の人には侮り誇るの僻あり富榮の人には緊く刻む僻あり此僻除かざるに依て人に忌惡まるゝ事なり忌惡まるゝ事積り累れて禍害にあふもあるべく唯己れを守り慈深く人を恭ひ謙る時は敵するものなかるべし敵なければ身安く心樂み其賜は永代の福田なるべし(袋の記)

雜談

さくらんぼの馳走

八萩生

最早や幾年むかしの事、將に沒落せんとする、名ある都をば小兒の救ひし、麗わしき、勇ましき話を語らん、歐羅巴の地圖を披き日耳曼の名都ハムブルグを見、或は其都の有樣如何に美麗に、宮殿は宏壯に、公園は見事に、且つ如何に怜悧に富有の民が住し居るかを讀みたる人あらん。

此のハムブルグは實に其むかし、敵のはげしき襲擊しば〳〵なりし爲め、人民の苦み悲みはたぐふに物なく、安き心はなかりけり。

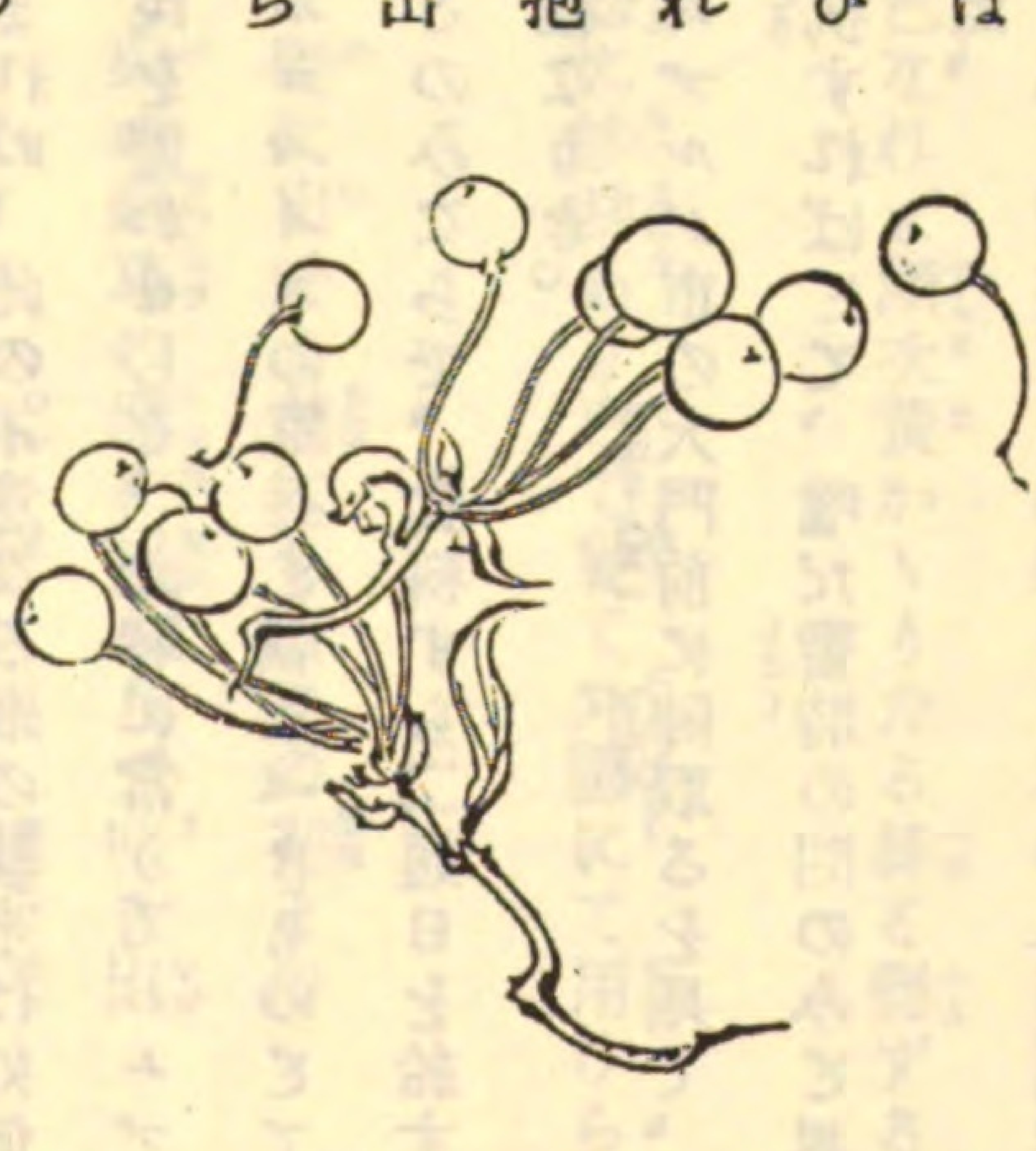
時は千四百三十二年プロコパイスの命によりてハスサイの軍勢より圍まれぬ、此の不意なる敵の襲來は如何にハムブルグ市民を驚かせしぞ、此時に當りてハムブルグ市民中、マルコパイスの軍兵と戰ふべきものとては僅少の人數なるのみならで、食料すら二週日を給するには足らざる程なりき。

プロコの大軍ハムブルグ市の大門前に陣取るを見て、市民は如何に抵抗すればとて、唯だ暫時の間のみと思ひければ皆云ひぬ、

『如何すべきぞ……誰とて助くる人はなく……吾々出軍せば打死は勿論の事にて、妻子は饑へ渴き空しく砦の中に死なんのみ』

斯る有樣にて皆々洶々として安き心なき中に、一人の

叫ぶものあり（今かりにＡと名づく、）
Ａ『子供ッ〳〵、見よ〳〵子供こそ吾々を救ふ者なれ』
他の人々は云ひぬ
『志かし子供が何する事が出來るものか…年は若し躰は弱し、戰も出來ず、食物を給する等の事は到底……』
Ａ『先づ〳〵門を開き…小さい者は少し大いものに手を引かせ、赤子は若者に抱かせて…彼のハスサイの陣營の前を通らせて見るべし…兵士も人なれば、往々情の爲には、和らぐ事あるものぞ　先づ子供を出すべし…さらば到底も兵士は子供を、害ふ事はせじ、又た吾が市民も殺しはせじ』
とて氣盛に説きければ、則ち市中の子供は一人も殘さず、排列せられぬ、ア、此時か丶る苦しき事をなすに至りし市民の痛み悲しみを想ひ見よ。
市門開かれて、徐々と出で來る者を見れば、勇ましき武裝なしたる兵士の隊にはあらで、唯だかよわき小兒の長き一隊なりし時、ハスサイの軍隊の驚きは、如何なりしかを想ひ見よ。
子供は皆白服をつけ、少し太き者は小き者の手をひき、赤子は抱かれし儘、頑是なく抱きつきて、何故出で行くやも知らず。



ハムブルグ市民の判斷は正しかりき、今此處征討に出で來りし兵士も亦、家には同じくか丶る頑是なき、可愛き子供をば殘し來り居るものを。

弱き、愛らしき、力なき足音をき丶、白服をつけて野陣を取りまきしを見し時、實や兵士の心は溶け、戰も分捕もなす氣は失せ、ハムブルグを落して、町を掠めんとの心は全く變じて、唯だ彼の愛らしき小見の心を慰め、接吻をもなしたき心を起しぬ、さらば兵士は小見に何事をなせしぞ。

陣營のまわりを見渡せば、今や紅き色の照るかと思ふ許りのさくらんぼは、其の木に滿ち取るべき人を待てる如きを見て、兵士の心は皆な同じき考を起しつ丶武器投げ捨て丶恰も競へる如く、紅き實滿てる大枝を折り取りもて、子供等にさづけつ丶、父や母によろしくと、云わぬ計りの好意にて子供等をば、家に／＼とおくり返しぬ。

ア、ハムブルグは勝ちぬ……血なき、恨なき、美はしき、偉大なる戰勝は、小見より得られてハムブルグは全く安全となり、小見等は割る丶如き喜び感謝の聲の中に迎へられて市にかへり來りき。

＊　＊　＊　＊　＊

後年に至りて此好談は『さくらんぼの馳走』とて其名高く、其紀念日には、實にみてる櫻枝をば其町中の小見の擔ぎまわりけると。

ア、世の歷史には血を流し、人を殺して得たる、名高き戰の話は、數こそ多けれ、ハムブルグの小見等が、刄に血ぬらずして、得たる如き見事の戰勝は、多くはきゝ得ぬ所なり。

◎下婢の欠乏　昨年十月頃よりして田舍出の女中漸やく欠乏を來たし勿論市中の婦女は夫々内職に忙はしく昨今に至り女中奉公を爲さんとするもの愈々乏しくなりしを以て桂庵の失望一方ならず之が爲め一度世話を爲したる奉公先きの女中をば甘く欺き轉じて他に奉公せしめ夫よりそれさ一人の女中を數軒に流轉せしめ其間に餘計の手數料を取る杯随分ずるい事をするゆゑ注意すべし

文藝

野路の梅花

き、よ　稿

上

征韓の議相協はず、浮世更に面白からず、寄る年月は會釋なし、身退ひて老を養ふも一つの樂み、ながく吾妻の砂挨に塗れし五體、今日よりは薩摩潟の風に飽まで吹かれて、子孫の爲めに、子弟の爲めに、惜からぬ身軀投げて遣らん、滿肩の榮譽は君にかへし奉りぬ、望まんものは腕と肝にて慥かに得よ、然し、似非忠義の奴輩には此の西郷手出しもさせぬぞ、いひつゝ昔し忍ばるゝ故國もの、衣一着、裾引き褰げ、見るから逞ましの毛脛露はして、吾妻の都を飛び出し、供は無用、行くも止まるも御身等の御勝手、布衣の身の嬉しさ、誰に遠慮の要もなしと、故園の草の家に悠々寛々、興に乘じては山に川に思を遣りつゝ餘念なし。

三年蜚ばず鳴かず、文弱に流れんとする浮世の波の間を、溯りつゝ逆櫓をやつりて自適の隱士、昔しながらの武士氣質に年少子弟の氣を勵まし、末頼母しき健兒の群に父と仰がれて薩摩潟の此方、日本全國を双の眼に冷やかに睨めまわし、那の小供等の爲ることとは。庭の面の雜草は抜き果てぬ、兒女の遊び相手にも倦みに。去ばとて机に向はむも懶し、むゝ那れが我愛する年少子弟の根城かと、遠く青空を摩でたる私學校の家の棟打見遣り、微笑ながら六尺ゆたかの胴體、椽側の柱に投げかけて瞑目沈思、稍ありて閉ぢたる兩眼クワツと見開き、天を仰ぎて大口あきつ洪笑一番、尾を搖り首を擡ぐる愛犬の背の上には、武骨の片掌いと物優かに措かれぬ。

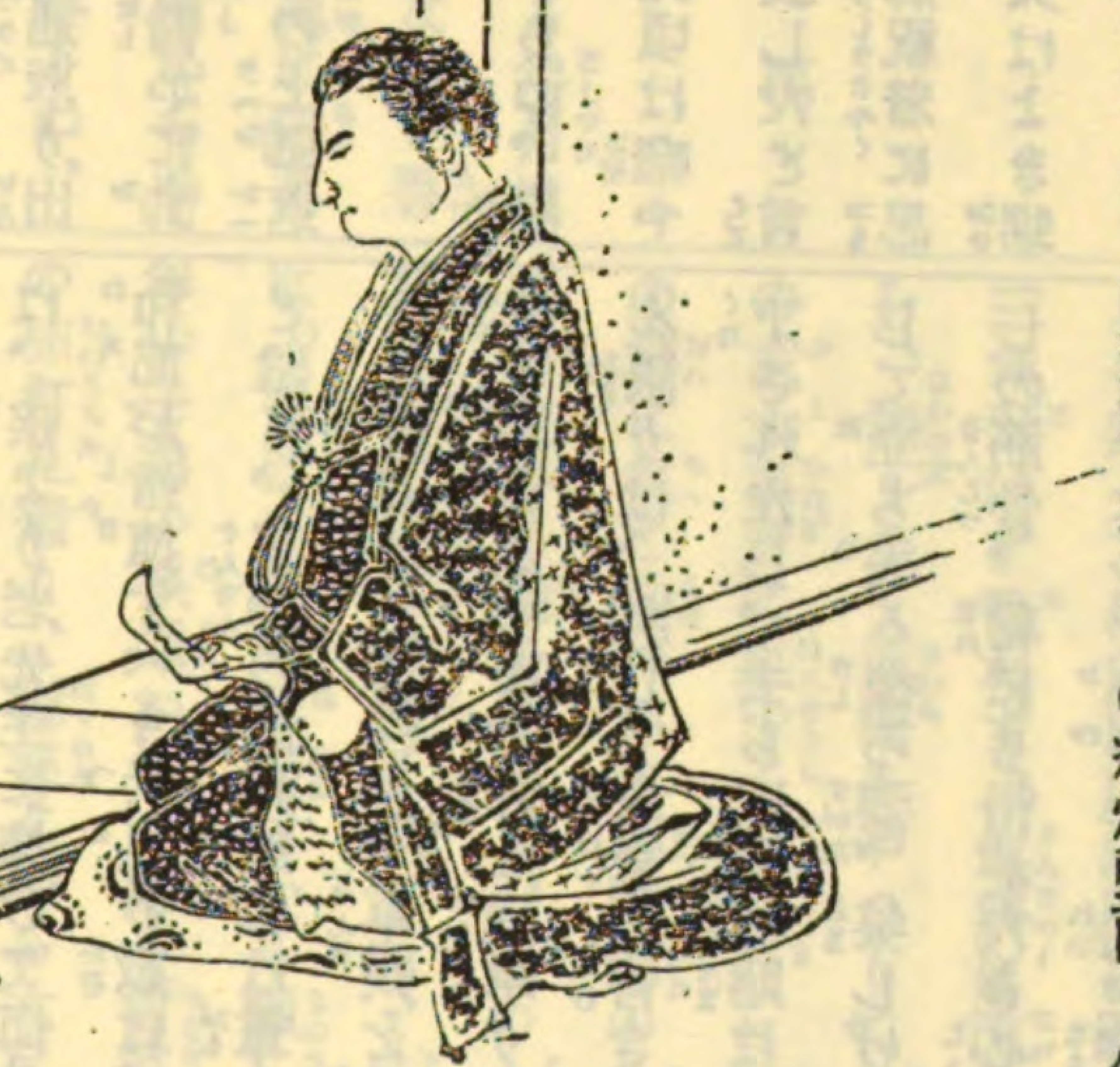
折しも前栽の柴折戸押して、蒼なす梅の樹の間に顯れ

出し一個の兵兒、古草履踏占めて飛石傳ひに歩み來りぬ、一歩、二歩、三歩、忽ち踵を返して門を出で草履脱ぎ棄て丶、暫しが程は暇呉れるぞ、老先生の手づから清められし園生、古草履の埃りに穢さんも恐れ、いひつ丶門を潛りて叉候飛石傳ひに靜かに歩みを運び、階段の下に身を縮めて叩頭再拜、懷裡なる一通取り出し、桐野篠原御兩所より老先生への御書狀、慥かに御手渡し申せと承りて推參、憚りながら御披見の上御返しを、いひつ丶恭しく捧げて頭を低れぬ。

兵吾か、よくぞ參りし、大義々々、遠慮はいらぬ、椽に腰かけ勇ましき物語にても聞かせずや、此頃は嘸や忙はしきことならん、書面の趣は西郷承知致したと言傳て丶呉れ、兵吾、よくも成人せしな、西郷祝着に思ふぞ、今は誰憚らぬ立派の兵兒、和郎が伯父はよき甥を持ちし、サ、椽に椽に、何、同席は恐れ入るとや、いひつ丶膝押進め片頰に笑を含み、又例の遠慮か、昔しを忘れぬ心掛け、神妙々々、和郎は幾歲になりし、む丶十九、血氣盛り賴母し丶、特に人品骨柄武士の家の子も愧るばかり、此上の骨折西郷國の爲めに賴むぞ、痛入りたる仰せ、肝に刻んで百年忘れは仕らず、身を碎き屍を曝すは覺悟の前、不調法なれども兵吾か身軀は、疾より老先生に捧げて御座る、よくも申せし兵吾、和郎が指揮すべき兵兒の數は、む丶凡そ三百小勢なりと雖も、軍陣の間和郎には重き責任があるぞ、言ふにも及ばぬことなれど、軍規を正しく賞罰を明らかに、努々心ゆるすな、仰せ謹承り奉りぬ、兵吾生命のあらん限りは、決して尊命に背きは仕らず、御心安く思召下されたし、去らば御暇賜はるべし、いひつ丶禮を正して立ち去る後ろ姿、笑しげに打見やり、見るさ丶逞しの筋骨、稀にも得がたき心掛け、門衞のむかし忘れずに、其身を卑下して禮を守るは、一ト入いぢらし、嗚呼、犂鍬を持つ百姓の小伜が、兵兒の先鋒桂兵吾か、

實に頼母しき奴ではあるわい。

日を隔つる二日ばかり、桂兵吾は兵見三百の長として、桐野の部下に花を咲かせつ、日頃鍛ひ上げし双の腕に、錬り固めたる全身の肝膽、熊本に、大阪に、東京に、薩摩の百姓太郎作が忘れ片身、桂兵吾が一世の譽、よし去らば世の腰抜けどもの肝冷してやんらと、凛々しき軍裝、犯しがたき風采、新政厚德と染め抜きし小旗、肩のあたりに靡かして、鞘を拂ひし一刀小高く捧げつ朝日に輝かし、一聲高く進めッ、聞くや否や兵見三百、歩みを進めて整々堂々。



中

見渡すかぎりの瘴煙彈雨、小豆大の膽に軍裝ひ覺束なき腰抜武士には氣の毒なれど、我ためには唯一の勇みの神、この景氣見る度毎に肉動き骨躍り、吉光の一刀生血に染めずば一歩も退かず、進んで群がる敵の弱虫ども片端より追ひ拂ひ、新に抜きし一個の壘、新政厚德の一ト旒吹き下す嵐に靡かして、野山震はせし烽火の響に微かながら五

体搖られつゝ、若草の上に矛を枕楯を褥に、勇み切つた
る味方の兵兒謠聞き流しての陣頭の小憩み、扨も小氣
味よし、扨も面白し、悽愴悲慘心魂を斷つとは那處の
光景、陰々たる腥風我面を撲つとは何奴の囈語。
想ひ出づれは我十六といひし歲の今月今日、亡父上の
紀念の此の一腰、母人の手づから讓り受くると、薩摩
隼人と世に謠はるゝ兵兒の一人に數へられんと、鋤鍬
に掌固むべき分限なるに、况して五尺にも足らぬ總角
の小童が、身の程も顧みず、西鄕老先生の慕はしとて、
伯父に縋りて僅かに私學校の門衞、老先生の厚志に閑
を偸みて文武兼修、鍛ひ上げし身軀一貫、細腕ながら
薩摩隼人の腕前は慥かに我物、錬り固めたる全身の肝
膽、鐵石ならぬ我身ながら觸れんものは木葉末座、我
は丈夫となりぬ、日本廣しといへど誰憚らぬ一匹の薩
摩の兵兒、
事しあらば我さきかけてかをらんと春まち顏の梅の
初花
これこそ伯父が首途を祝して送り吳れたる一首、勇氣
は日頃に百倍したり、落來る彈丸刄向ふ敵兵、一つは
鐵屑一つは肉塊、手玉に取らんこといと易し、嗚呼、
思へば此の身此の膽、總て是れ老先生の賜物よ。
國のため君のためとしいへば家ものかは、日頃錬り
固めたる肝膽一つ、朝日影さす山櫻の眺め、今の毛唐
人輩の眼に見せてやるぞ、むかしながらの祖先の遺志、
我日の本の大和丈夫の色香のほど、鷄林の野に示さん
ものと、聞くも目出たき老先生の企て、征韓の論とな
りて廟堂の議に上るや、そは無謀なり殘酷なり、外國
よりは內地こそ緊要、攻めて取ればとて手に堪へまじ
とは何たる腰拔の痴言ぞ、大國は宜しく小國を憐めよ、
少しばかりの彼れの無禮、目を塞きて知らず顏せよと
は何たる卑屈の口上ぞ、それも幾歲といふ永の月日、
武士の袖の下に太平無事の夢貪りし、長袖が言ひ分の

みなれば兎も角も、苟にも薩摩隼人と世に謠はれし身を持ちながら、京都吾妻の風に總身の肝膽吹き拔かれ、恩に背き義に背き、老先生の企を拒み立するさへあるに、青公家共の太皷叩くとは卑怯至極、おのれ大久保輩、君の御稜威の汚れも心に留めぬか、よし去らば今に目にもの見せて呉れるわ。

名を内治の改良にかりて、さしたる要もなきに土木を起し、あたら國資を減損し、口を善隣の交誼に藉きて、女々しくも他國の凌辱を甘んじ、國民勇武の氣象を抑制す、件の如き有樣にて、こゝ十年も經たらんには、朝日に匂ふ山櫻の我日の本は如何ならん、切齒、扼腕、得堪へぬまゝに、事をあげて君側の害を除き玉へと、老先生に迫りしことも度々、去るに先生は只管輕舉を戒め玉ひぬ、吾等老先生の戒めに止むなく無念を忍ぶ其年月、奴輩僥倖にも枕高く夢を結べり、去れど是れ浮べる雲、薩摩嵐の疾く起きて歡樂の夢吹き破り、彼奴首を低れて罪を詫び、天に謝する姿は今目の前。

ことし戊寅の春、人は其全身の至誠を籠めて、師の爲めには萬福を祝し、友の爲めには千歲を祈るべき年の始、師として荷へる恩淺からず友として受けし義の厚きをも忘れ果てたるか彼奴痴漢め、さなくば我意を振はんにも眼の上の瘤となりて心の措かるゝか、卑怯にも未練にも刺客沙汰、我老先生に秘密の刃向ひ、人は知らじと思ふが白痴の項上、四知の敎へは彼奴の腐れし心を何時しか振り棄てたるものと見へ、しら〳〵しくも五六匹の弱犬、鹿兒島城下に放ちけるに、瞬く中に我等のとりこ、何故と仔細を問へば存ぜぬ知らぬと言葉を左右、此奴何として其利口なる口振りは學び得たる、言語の應對今は要なし、無禮者、卑怯者、八幡堪忍なりがたし、薩摩隼人の面を泥もて汚す愚物、朝日輝く國の光りを遮ぎる奸物、容赦の限りにあらずと、老先生を要しての旗揚げ、南無や八幡大菩薩も照覽あ

れ。

熊本城は終に我が物よ、懸軍早既に數月に及ぶ、敵味方分け目の戰も今日か明日か、大隊長の言葉の端戰期熟したりと悟られぬ、鋭氣を養ふて非常に備へよとは實に嬉し、薩摩の兵兒が必死の腕前、揮ふて敵の先鋒挫いて呉れん、先登第一桂兵吾と名乘つて呉れん、愉快々々、老先生の恩義に酬ゆるもこゝ、伯父の厚志に答ふるもこゝ。

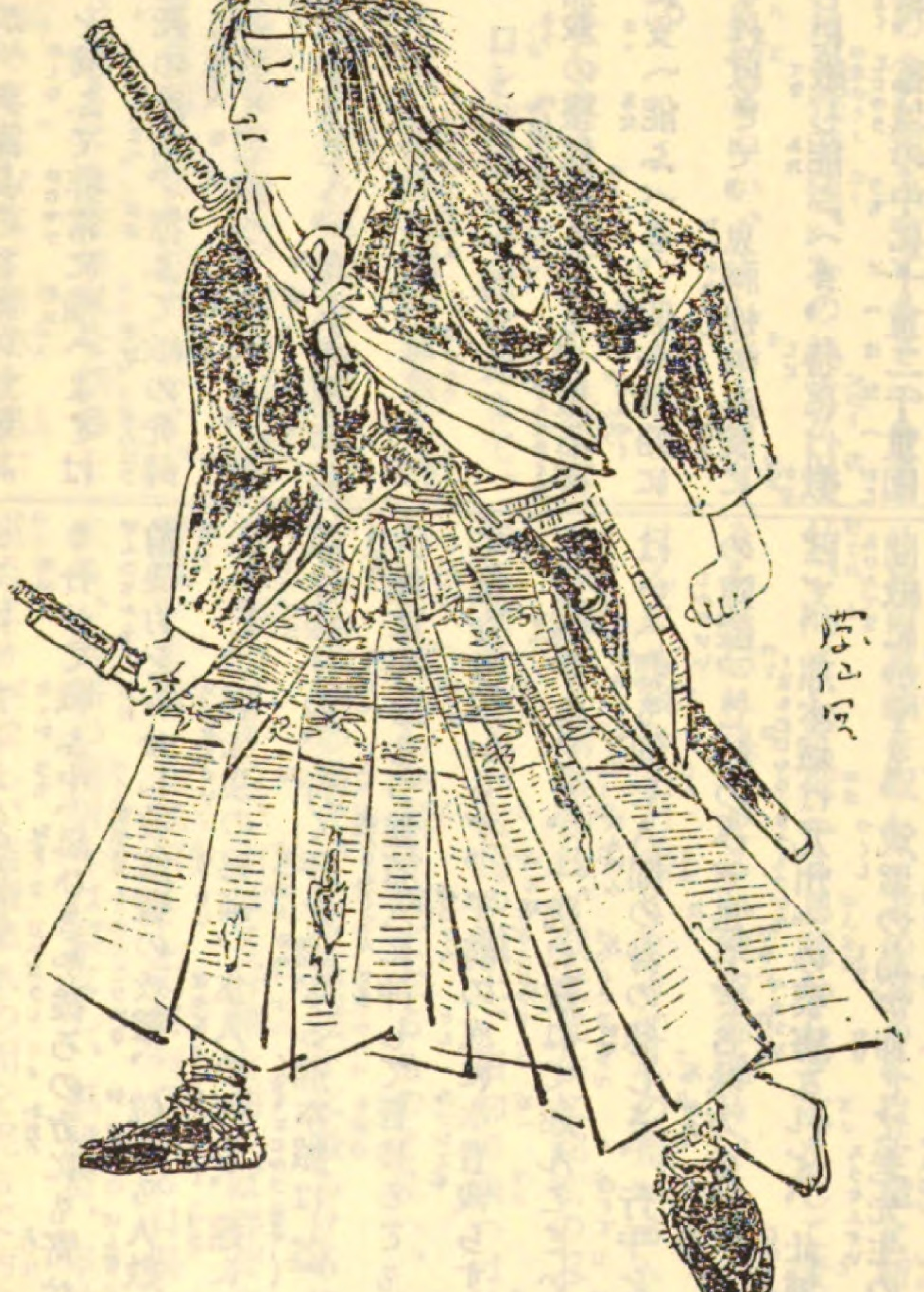
下

假令清正が繩張にて日本無双の堅城なりとも、巖石碎かん薩摩潟の荒浪を何しに支へ能ふべき、假令智略に富める明治の楠が城將なればとて、鬼神挫がん腕に力をこめし隼人の鋒先何しに敵し能ふべき、特には數知れし城兵に限りある糧食、孤城の中に十重二十重圍まるゝこと早や幾月、響き渡る兵兒謠に耳を驚かし、果は城西の落日眺めて、一行の涙にや咽ぶらん孤城の將卒、哀れ今宵こそは打死の本懷遂げさせ呉れるわ。ヲ、殊勝なり猫を嚙まんとする鼠眞似びて、自から打つて出でたるか知死期の弱虫、よし其義ならばと、扱き合せて戰ふ中、思ひきや後ろの方にも寄せ來る敵軍、前後力を合せし彼奴輩の攻擊、餓鬼も人數とはよくも云ひし、老先生の秘術、隼人の死力、遂に甲斐なし鋭氣は挫けぬ、行く手を遮ぎる熊本城は益々固し。

大地に根をもつ盤石天に沖して聳ゆるとも、踏み碎ひて進むは難からず、千尋の底に水音洩らす谿谷道に横りて遮ぎるとも、一跳ね跳ねて越んこといと易し、とはいへ我も同じ人間の身の悲しさ、行手を遮ぎる人間の障礙、これのみぞ足らざる味方の手一つにては力及ばず、熊本城は九州一の要害なれど、此城一つ暫しが間敵にかすも、筑紫の島が何とて老先生の手を離るべき、よし手を分ちて九州一圓に蔓らん、いひつゝ隊を分ちて跡をも見ずに繰り出したる隼人の幾團、桐の一

葉に秋の知らるゝ、野山驅け拔け、勢鋭どく豐日隅三州に血の雨降らせしも、新政厚德の旗さしもの、錦旗の前には勇猛の勢なし。

我もし鎗一筋の家に生れもしなば、何とて安閑と今日の日を暮すべき、長の年月奴僕として老先生の大恩受けし報ひをなさんは今日只今、六十路にあまる棄てられるもの、皺腕ながら、及ばぬまでの腰刀の切味試し見て、運拙なくば潔よく老先生の馬前に死出の一花咲かせんものを、鋤鍬に生命つなぐ家に生れしこそ怨み、老ての後の樂しみにもと要なき歌俳諧にこの身苦め



つゝも、男の身の不覺さ刀持つ術さへ心得ず、甲斐なき老耄の身軀一つ、折もあらば捨てんとは思へど、路傍の叢肥すも能にはあらじ、神妙に老先生の仰せ謹承り、人夫の百長力を盡すも御報恩の萬分一、那の甥の兵吾こそ果報もの、心掛ある若者とて兵兒三百の旗頭、いひつゝ遽かに笑漏らしつゝ、勝敗は畢竟時運のみ、死地に瀕して生を得るはまゝある例し、正義は味方にあるものを、よし戰には甲斐なくとも天道の光り滅する時なし、老先生の忠義の精神、神には慥かに照覽あり、要らぬ心遣ひ止めにせよと、自から心勵ましながら、味方の築きし屍の山、味方の流せし血潮の海、流石無情を感じてやら、昨夜の激戰に形骸離れし諸天の靈、老爺の手向不足ならんが饗けて玉はれ、一滴の暗涙を香花にかへて、瞑福を祈るも老の癖、鈍りし歩みに力を籠め、踏み占めながら辿り來りし久住(豐後)の森蔭、思ひがけなき出逢がしらの手負の少年、伯父御ツ。

見れば肩のあたりより鮮血淋漓、眞紅の色に染たる衣には、銃丸の紀念を幾許となく留めし破れ袴、鐵砲抱きて五躰支へつ髮振り亂しての大童、無念に裂けんばかりの眥釣らせながら、双の瞳を時ならず時雨に曇らせて、僅かに身を寄せつ聲震はし、伯父御よ、今は詮なし、桐野殿にも連戰連敗、如何にもして本意遂げんと、焦燥れば焦燥る程に味方の不利、暫しの間鋒先收めて、城山に再擧を謀らんと、今朝疾く引上げ玉ひしにや、那處を訪ふも味方といふもの影もなし、特には我あづかりし一手の兵兒、敵味方に鬼神組と稱へられしも、昨夜の一戰に枕並べて一人を餘さず、我其時敵の素首十五六も刎ね飛ばし、處移さず慥かに打死せしと思ひしが、惜しや先刻蘇生りて再び無念の齒を嚙みぬ、所詮甲斐なき五體に心ばかりの兵吾、見事腹かき切りて冥途の先陣致す所存、いひつゝ次第々々に衰ふる五體、

ぶる／＼ッと震はせたり。

出來いた兵吾、伯父も滿足嬉し涙が、いひつゝ得堪へぬ兩眼の血涙、震はんばかりの聲に力を籠め、

時は來ぬ月の桂の花やかにさきかけて名ににほへますらを

伯父が餞け冥途の土産に、無念の程は察すれども、和郎が骨折老先生には疾く御承知、相見ん折はよろしく慰め呉れよと、身に餘りたる兼ての御言葉、快く腹かき切りて冥途の先陣、恐れながら老先生に代りて、この伯父が慥かに賴むぞ桂兵吾、聞きて滿面の笑に傍の石に腰打掛け、見る中双肌押しくつろげ、腹には十文字に眞紅の色、刀取直して、首に當てし刹那、待て兵吾、勇ましき今の最期、語りて母を歡はせん、心殘すな、母の身の上、伯父御、慥かに賴む、便りなき母御の上、首肯く伯父の顏笑しげに打見やり、去らば、いひつゝ全身の力を双の腕に集めぬ。

夕陽の餘光に染められたる林頭を縫ふて、秋の哀れをかこちつゝ塒に歸る鳥の聲、那處の山寺にや撞き出しけん鐘の音に和して、去らでものことなるに又一層の凄味增しける黃昏時、置きまさる萩の下露に打しほれたる一人の老人、袖に隱せし一つの包み取り出し、但ある木の下蔭に埋めつゝ、小石拾ふてそが上に心ばかりの標、伯父の平作、一遍の稱名手向け申す、甥よ、兵吾よ、和郎が最期の有樣、此の伯父羨ましう思ふぞ、稍暫しが程は堪へかねし名殘を惜み、軈て去り難き思ひを溢るゝ兩眼の涙に語らせて、尾上にかよふ風に衣の裾を拂はせつ、哀れげにすだく虫を驚かして遊む後ろ姿、漸く濃かなる晩煙に鎖ち籠められ、梢に殘る上弦の月が風にさそはるゝ落葉照して、獨り得意がほに秋の風情を添へたり孤墳の邊。

擬世の中百首

藥庵子鐵心

擬世中百首（下）

本歌　鐵心

註歌　信翁

世の中の事はさま〳〵多くとも　我か爲業を能極むべし

古への賢き人の敎をは　知れは我身の爲業をしる

世の中の勢ひをしれ五月雨に　せきて留らぬ山川の水

迷はしな世の勢ひに隨ひて　身の浮沈をば道に任せん

勢も暫しのものに世の中は　雲晴ぬれば月は澄けり

勢に乘時無理や依怙贔負　欲を積りて淵に落入

梓弓引て發さぬ守りこそ　道を歸る人の世の中

古への敎の道を敬て　學ふそ今も人の世の中

顏色ば心の影そとゝのへて　人の見るめを耻よ世の中

喜ひも受る恨もあらはれて　云にまされる人の顏ばせ

世の中は如何〳〵と取つめて　極めねは果敢行ぬものなり

道といふ墨くせを能手に持て　撓つ詠つ琢つ磨つ

世の中は月よ花よも一盛り　程なく吹は秋の夕かせ

花の色は移りにけりな徒に
　我身世にふる詠せしまに

世の中に人を能せんと思ふこそ
　我を離れし菩薩なりけり

何事も我身勝手の能様
　するは天理に背く人なり

物を能堪ゆる人は世の中の
　賢き人といふへかりけり

彼岡に氣儘に生る樗の木
　ねろけ寒けて見る人もなし

世の中は理に極れるものなから
　理屈に落る人ははつかし

事ごとに理屈たてする世の中の
　人は道理をしらぬなるべし

藝能は習しの多少淺深に
　上手と下手は分る世の中

習とは鳥の數飛〳〵に
　千里も凌ぐ翌となる

世の中は有にまかすれは安して
　無に任する事そ難けれ

貧しくも我情欲を堪れば
　富る人より心靜けし

世の中は人の眞似にて暮せとも
　人まねしては悪き事あり

よきまねをすれば移りて自から
　我物に成そ嬉しき

世の中の用有時は用器にて
　用無き時は空器なりけり

世の中の用と不用にかゝはらす
　空器にならぬ覺悟尊し

世の中の鳥は林に魚は水
　人は情の下にすむなり

人はたゝ惠にもれぬ天地の
　心にかなふ道や學はん

世の中をいかに渡ると浪風の、
　心もしらぬ舟そあやうき

風吹は陸路も波の立田川
　越るは智恵の梶そ有へき

取付は離れぬものそ世の中は
　つかす離れぬ味をしれ

打人は功者も迷ふ枰の上
　飛のいて見る下手は入目

新しき事は吟味の世の中に
　有來る事に費有なり

勢と時と事とを味ひて
　爲すは功者の入ところなり

爲度と頻に思ふ事に社
　分別は入人の世の中

善も惡に惡も善事と成ものを
　爲度儘に爲はあぶなし

捨て見つ取てもみよや世の中は
　深き味有ものと知べし

何事も時の用捨は世の中の
　智者にあらすはしらぬ味ひ

人にして人に成すは世の中の
　人の人たる甲斐は有まし

恥を知は恥をのかるゝ理りを
　知ぬ人社恥をかくなり

世の中の人は數なく多けれど
　人の道しる人は稀なり

人の道を知たる人は稀なれば
　書より外に誰に學はん

箭の糸切へき時に切されは
　後柑に成人の世の中

世の中の事を上手にやる人は
　見切心そすくなかりける

小賢くみゆる童は大形は
　長なりては馬鹿の世の中

齢よりは利發な子とてもてはやす
　親の心そ愚成けり

我心誠なきより疑ひは
　發るものそとしれやよの中

疑ひは邪推といへるくせ者の
　主と成て居れる故なり

世の中は輕くして又重くして
　重くして又輕きものなり

輕重は道の秤を棹として
　能針路を改て見よ

我心今思ふ事の後違へるは
　誠なき故としれやよの中

人により又我による世の中の
　前後相違は僞としれ

船は破れ筏は浮ぶ道理有
　能心得て渡れ世の中

事ごとに爲にしらへんと思ふまに
　わたり障りの出來る世の中

數寄ぬれば事は爲習ふものなれど
　好は惡きとしれや世の中

好といふ名は惡けれど我家の
　業には深く好や世の中

世の中は好不好にはかゝはらて
　唯當然の則を勤よ

當然の則を勤る心こそ
　又我家の業に好成り

皆人の情をしらぬは自から
　世の中人に和せぬものなり

身をつみて人の痛無しられける
　嬉しさも又身に受て見よ

世の中の事は功者に有そと
　てして持顔は人悪むなり

何事も我入物の狹き故
　あふれて外に見ゆる成らん

疑ひは殘すへからす世の中に
　疑はしくは早く辨せよ

速にしてよきも有日を重ね
　漸く解る疑ひも有

つら／＼と流るゝ水は潔し
　よとむは濁る人の世の中

靜かなる心の底に塵もなく
　邪欲を拂ふ工夫わするな

世の中の月よ花よは云てよし
　當世の沙汰云ぬものなし

愼の心をゆるす時にこそ
　取かへされぬ言をいふなり

差當る用事なくして他の家に
　行さるものと知や世の中

少時も身を徒に暮さしと
　思ふ人こそ人に成らん

用濟は其座を早く立てよし
　長居はあしきものそ世の中

十に七ッ志たる事は惡きそと
　賢き人のおしへたまへり

世の中は有益無益を考へて
　無益の事は除くへきなり

徒に居ぬとそよけれ苦しきを
　堪て爲は益そ有ける

世の中は益ある事と思へとも
　志らすはからす無益有なり

何事も我如才に引れつゝ
　覺えすしらす無益をそする

よしあしや荻萩眞薦葛沸草
　似たる類は多き世の中

世の中の人程知ぬものはなし
　能く試て交りをなせ

金言を自からにも聞習ひ
　口にはよくもいへる世の中

いとゝさへ三盃過て我計
　知たる顔にいふそはかなき

よの中の備は兼て能計れ
　極る時は無分別よし

心置常に仕組をする人は
　變に應して迷はさるへし

精しきは事によるへし世の中は
　大躰にして置へかりける

古への人の教に随ひて
　我職分を極むへき哉

詠てはかはらぬ色そ世の中は
　見ぬ吉野こそ花盛なり

散ぬ花盡ぬ匂ひは古への
　書の中なる三吉野の山

恨るも腹立も又思ふゆへ
　もと仁愛の人のよの中

天地の恵にもれぬ世の中の
　風雷も外ならぬかは

世の中を天地一箇の傀儡と
　見るも狂言好のよの中

飛越てかゝる見立も有馬山
　いなとはいはし好はあふなし

世の中に今思ふ事も實なれと
　道にあらねば僞となる

墨くせをもては心の正しくて
かゝる紛れは見ふるよの中

豫め思ひ計れは大きなる
過ちはなき人の世の中

智慧深く事を計れは世の中の
近き憂のなきそ目出度

何事も初の程は勤れと
後は疎に成は世の中

退屈はふたまた我手に入ぬ故
手に入まてと勵てやみん

初めには善事と見へて末々に
悪事と成は人の世の中

世の中を慮りて爲人は
末にあるしの顯れそする

世の中の理は高上を能として
落れは強く身に當るなり

人毎に高上の理を好むなり
されとも多分益はなき哉

世の中の雨の數をは知とても
人の心ははかるへからす

視觀察の敎によれは難からす
心學といふものはむつかし

世の中に珍しからぬ事社は
大概は皆善事としれ

珍敷事には迷ふ人心
近く常なる道を見よかし

世の中は割合せたる如くにて
更になき無ものとしれ

夜晝の三日を見ても悟るへし
てすき間無ものは世の中

世の中に無邊法界なとゝ云ふとは
子細の有と知へし

其道の徼によれは子細有
　されとも深き事にてもなし

氣味の能事は悪きそ事理
　ともに平易なるよし人の世の中

剛毅なる人は利き言態も
　悪きと弖究めおらなん

飮食と男女の欲は人の常
　理に背かねはよしやよの中

我好にひかれてゆるす心より
　理に背きぬる誤そ有

色の染心は老も稀の
　殘るものなり人の世の中

若きさへ見苦しき世に老耄て
　色に戯るゝ人は淺まし

世の中は語り盡さぬとの葉の
　殘り多きそ命なりけり

古へは人も心に惜まれて
　いくらの書に殘すとのは

世の中は今此時を惜むへし
　今日の今宵の月は又なし

一時も過て又來ぬ月日をは
　只徒に暮すへきかは

馴れて後水の早瀬も世の中は
　渡る人社渡るなりけり

馴るゝとは不斷の修業稽古なり
　憶病も又不馴より社

世の中の心は一ッものなれと
　大きに違ふ人も有なり

耻かしや人は有智無智三十里
　上智と下愚は幾千里かは

世の中の道理と思ひ濆たれと
　違ひ有へき事を社思へ

老功の人の謂は淺けれと
思へば深き道の敎そ

元文四龍集丁未暮春於幻々庵窓下詠之

寶暦八年戊寅孟春不才を不厭鄙言を贅するもの也

葉庵子鐵心

蓑軒恩田一均

◉貸家の好景氣　昨今山の手にて一軒の貸家がある時は一時に三四人も借手が來り或は一足違ひにて人に借られて落膽するものあり如何なる陰氣な家にても隅ッ子の家にても明いたが最期我勝に借りるさいふ有樣にて戰爭中は店子の方が勢ひ強く家主は家賃を引いても居て貰ひしが此頃は之に反して家主の方に八分の强味を持ち地代家賃は上げこそすれ決して引く所でなく愚圖々々すれば店立てを持懸けるさいふ極端なり昨年一昨年は貸家なんぞは建てる者でないさ歎せし連中も今は地所さへあれば貸家を建てたいさ云ひ居る程なりさ

談叢

南極地方探檢記（上）

楓葉譯述

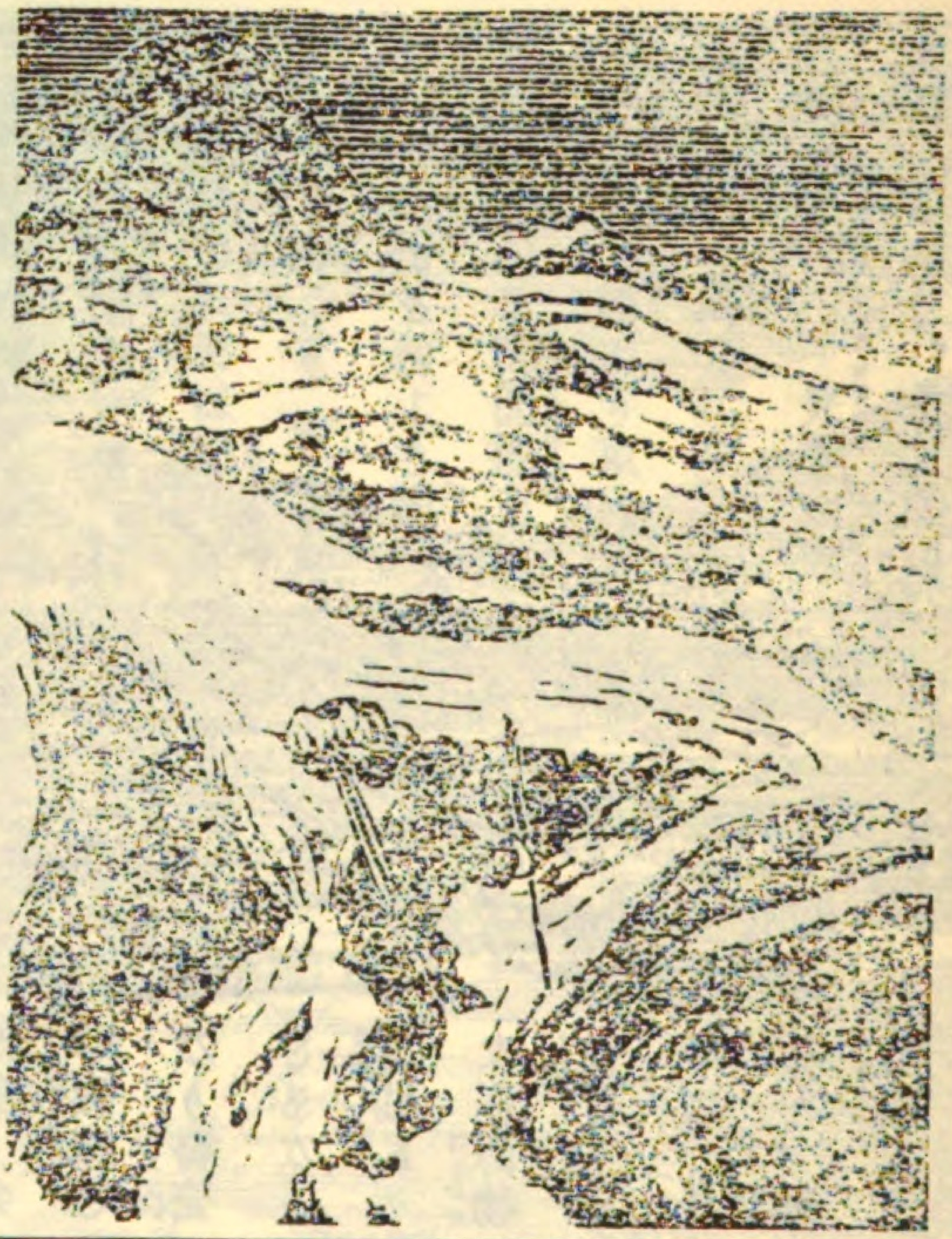
地軸の兩端の中、北極は已にフランクリン、ピーリー、ナンセン其他數多の探撿家によつて十分の七まで探索せられ、今は僅かに其三分を剩すのみなれど、南極地方は兎角探撿家の足向かず。唯南極圏内には茫々たる一大陸濠洲よりも大なるものありて橫はるさ云ふ臆測のみにて、其不明の版圖實に北極地方に幾倍し、幾多の面白き事實貴重の物空しく封じて氷雪の中にあり。此處に譯述するものは、那威の科學者シー、イー、ボルチグイヴィンク氏が、昨年那威の捕鯨船アンタルクチック號に乘りて、濠洲を發して南氷洋に入り種々觀察し來りし紀行なり。原文は本年一月の米國センチュリーに出でたるもの、挿畫は原作者の揭けるものを摸寫したり。

サア、ゼームス、ロッスが「モパス」「テルロル」の二艦を率ひて南泳洋なるヴイクトリア、ランドに遠航して歸りし以來、五十四年を過ぎぬ。其齎らし歸りし報告を見れば、學問上にも將商賣上にも實に莫大なる望多

き新版圖こそ南にあることとなるに、不思議にもロッス氏のあとをつひで南極探檢にかゝる者なかりつるが、こゝに那威のコンマンドルスヴエンド、フオインと申して當年八十四歳の老功者、多年の働きによつて莫大の富を致しゝところ、猶も南氷洋地方に眞鯨を探索さす可き望を起し、サアゼームス、ロッスの報告書を便りとして、一隻の老朧虎獵船を仕立て、之を「アンタアクチック」號と名づけて、南に向けしむることゝはなりける。此船クリスナアフの船渠を出る時、右の老功者フオイン氏は船中を見繕ひて、蒸滊釜に如何にも申分ありと言ひ募り、果ては勳章夥多下げて士爵に叙せられたる老紳士、黒のコートに山高帽子かぶりながら、ごそ〳〵蒸滊釜の内に這ひ込みしに、果して釜に申分ありければ、人皆流石の老功と驚嘆したりとぞ。偖アンクアクチック號は長き航海をなして濠洲メルボルン港に到着したりけるが、時候少しく晩かりければ、更に明春を待つて南の方へ乘り出すことゝなり、其間に濠洲の東南を乘り廻りて捕鯨に從事す可き由命ぜられたるも、多く帆綱を失ひ僅かに一頭の眞鯨を獲たる後、空しくメルボルンに歸り來りぬ。千八百九十四年九月十四日、記者がメルボルンに到着したる時は、アンタアクチック號の消息右の如くなりき。



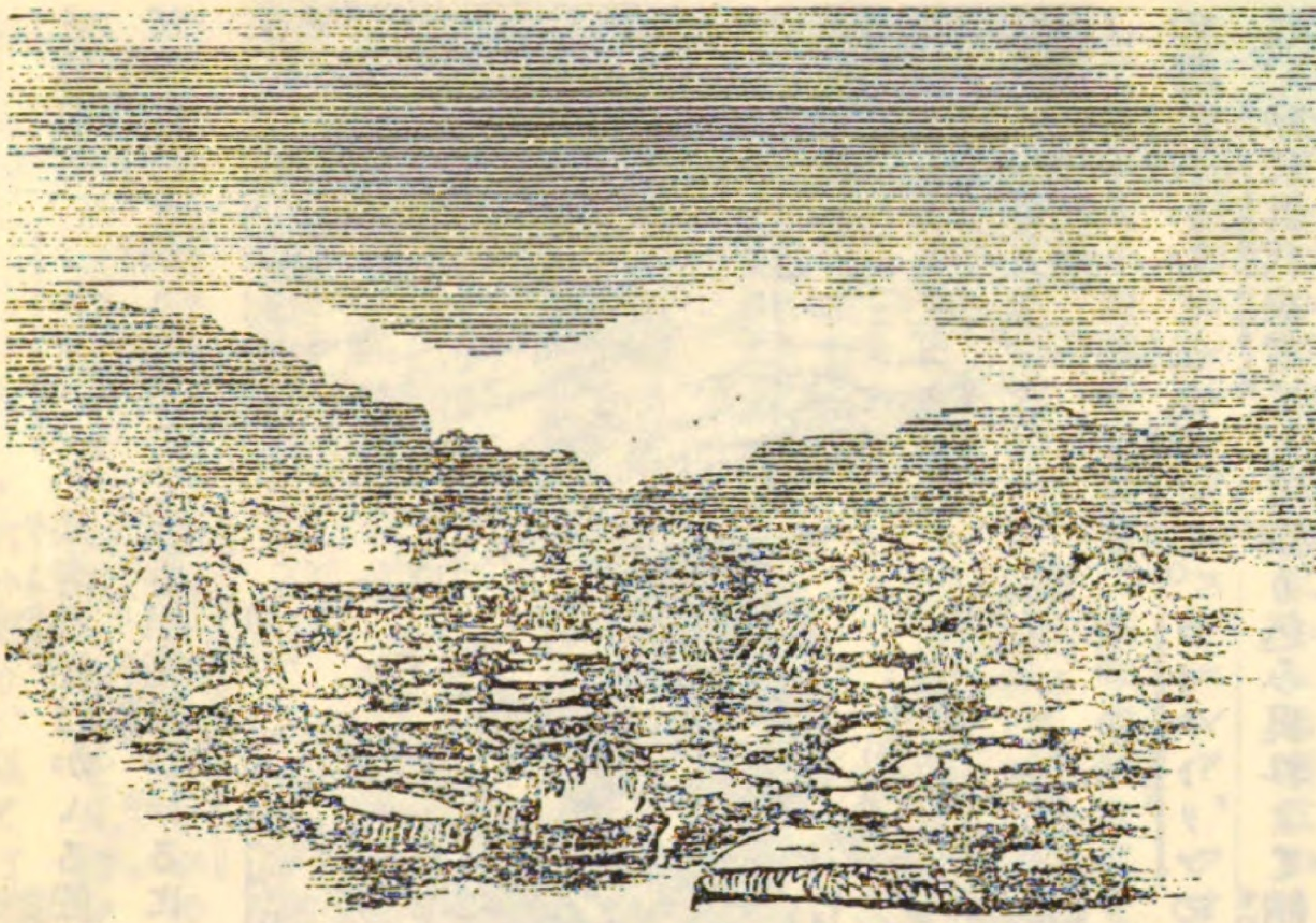
偖此度の航海には一名の科學者は是非共なくて叶はぬとなれど、メルボルンの學者仲間はかゝる船に打乘りて南氷洋を乘り廻ること險呑至極思ひけるにや、一人



の吾れ行かむと云ふ者なし。ウイクトリアの地理協會は、余に其代表者として乘り込み呉れよと請求したるも、然る責任を帶ぶるは面倒なりとて此方より斷はりつ。記者は終に臘虎射手兼水夫として、時には皮晒も務む可き約定、且つ隙々に蒐收する所は自分の有となる可き約定にて、此舟に乘り込むことゝなりたり。此時那威より急信到着し、船は俄かに出帆を急ぐことゝなりければ、記者は早々に煖かき衣類長鞭等を調へ、取急ぎてアンタアクチック號に乘り込みたり。船は三百二十噸の小船にて、副螺旋を有し、一時間五節の速力なり。

甲板に足踏みかゝれば、記者が十四の年初めて帆船に乘りて太西洋を渡りし時の記憶ありありと浮びぬ。綱や、棒や、錨や、銃や、魚叉や、小艇や、箱や、乘組水夫や、商品や、紛々として甲板に羅列す。前甲板の方に行きて吾居所を定む。此處は桅の前、甲板の下にて、三十六呎四方の部屋なり。此處に六人割據すれば、一人分の所有六呎四方となる。光明は天井の窓より入りぬ。六個の寢所上下二列に並び、三呎に六呎の

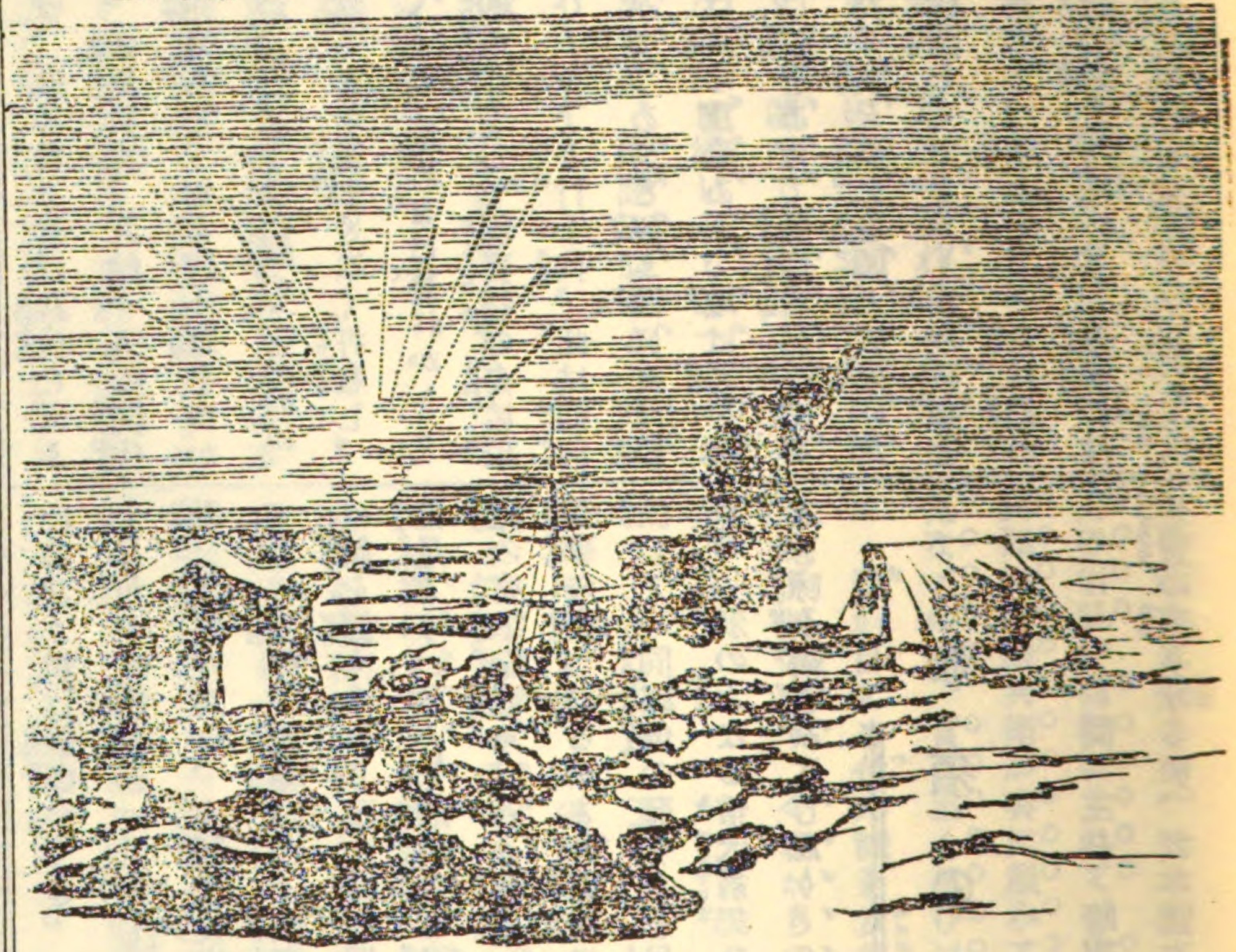
寢床に二枚立ての戸を仕切れば、內は先づ寢棺の樣なり。此より六ヶ月が間、余が寢床となり書齋ともなり客間ともなり博物館ともなるは、此なり。乘組渾て三十名。皆那威より來りし面々にて、何れも北泳洋に臘虎獵の經驗ある輩、肥へて光り鯨油に染みたる男等なり。此等の面々は何れも妻子家族を故鄕に殘して、一命を賭して其捕へ來る鯨脂の價の幾分を得むと、一身の骨折を是非なくも棄賣にする輩にて、粗豪千萬なる其相貌の下には、勇ましくもやさしき信ごゝろの滿ち〳〵たる人々なり。



翌朝地理協會員一同甲板に來り、送別留別の演說祝盃交々ありたる後、アンタアクチック號は喝采の聲中に徐々メルボルンを出帆す。時に千八百九十四年（明治廿七年）九月二十日にぞありける。

偖我々はタスアニヤの西南岬のあたりにて二三週間抹香鯨を漁する筈なりしが、一頭も見當らざれば、此度はローヤル、コムパニー島へと船を向けけるに、三日が間唯海藻四面に亂茂して何れ陸の近きを察するのみにて、更に島を見當らず。十月十八日疾風帆綱を鳴らして、初めて雪降る。時に一羽の大なる信天翁あり。

来りて船上に宿りしが、天氣晴るゝと共に、扶けて去らしめたり。夜に入り月いと明し、十二時頃に到り南極光を南天三十五度の高さに見る。一條の白光西より東に走りて燦然たる楕圓橋をなし、光は恰も西より斷へず輝やき募るものゝ如く、五分毎に光は絶頂に達し、忽然消へ失せてはまた五分間に燦然たる光を復し來る。二時頃に到りて、立ち渡る狹霧に包まれ了んぬ。



十月二十五日の夕、カムベル島のノルス港に投錨し、次日忍耐灣に轉じて水槽に水を汲み込み、いよ／＼南方に入るの準備をなす。此カムベル島と云ふは、遙に見れば全く噴火質のものにて、近寄り見れば青草島に茂り數頭の羊よく繁殖せり、此羊は難船者の不時の要を慮りて、此處に置かれたるものなりと云ふ。此あたり無數の腦虎岩の上に背を曝し、海豹またあり。何れもよく繁殖して

皮滑らかに疵なきを見れば、此あたりには其仇と云ふもの更になきを知る可し。此島にて、百餘一人の同伴者と共に、信天翁の卵を求めんと、岩を踏み草をつかみて峰高く攀ぢ上りつるが、卵はなくて雛のみなれば、其皮にても取らむと大きなるもの幾羽となく打殺し、其を肩にして山を下りかゝりぬ。時に日は暮れかゝり、遙か下を見れば灣內の我船小さくして玩弄物の舟に似たり。肩の重味によろぼひ／＼下り行く內、此は如何に、足下の地づぶりと沈みて、あつと思ふ間に身は脇壺まで地に沈みぬ。肩には鳥の重味あり、地は吾を吸ひ込む樣に沈み行く。余は聲をあげて同伴者を呼びながら、鳥なげすてゝ持つたる銃を斜に吾頭上に擎けたれば、銃恰も穴の兩端に橋渡してやう／＼爲めに身を支へ、兎角する內同伴の男來り、辛ふじて一命は助かりたり。此は小さき噴火坑の跡とも見へて、矮樹の枝にて隱れ居れば、余が陷りたるも宜なりけり。斯る穴、此あたりには數多ありき。

十月卅一日錨を拔いて發す。南岸に近づきぬる時、海豹を搜索の爲め、小艇二隻出せしに、一隻は浪を浴びて岩に碎け、乘組は辛く溺死を免れたり。內にも一人は銃を握りながら三十分が間大波の間を泳ぎ居たり。」偖是よりいよ／＼船南方に進むにつけて、打寄りて一通の書狀を認め、各々記名して、メルボルン廳在那威領事の與へつる小さき膀胱に丁寧に封じ込み、波上に流して一同郵便の發するを目送し居たりけるに、無殘や、一羽の大なる信天翁舞ひ來つて、あれと云ふ間に之を啄み鵜呑みにしたり。

那須の面影（下）

湖處子撰

同　三日　晴天

葱賣の來りけるに、我本國などに似るべくもなく、悉

くむきて、白根を顯はし、奇麗なるを鬻ぎぬ。
此里にては、我が國の隱元豆を、鉈豆及南京豆と唱へて鬻げり。
國々にて様々のたがひあるも、風土の變れるが如し。
朝商の女ども、賣溜の代もて酒に代へ、あるは飴に代へ、おのがさま〴〵心ゆくまゝ遊びて、午過る頃己が里へ馬引き戻るもあり、又は終日嬉じみて歸へるもありて、總じて無心に田舍めきて、媚諛ふ態なき、殊に古風なるいと頼もし。
此里に限らず、野州大凡農夫は足中を履きてあるけり、大古の風俗殘て律義なるいとめでたし、

　足中や半は青き今年藁

此程より虺に喰れたるよしにて、竹林にすがり片足あげて飛び〳〵あるける若き男あり。一週間浴せざるに杖は用ふれど、足は陷付てあるき侍り、當地蛇喰殊に妙なりと、旅行用心抄に出し言、目の前に驗ありて、いと新たに覺えぬ。
刀の引肌、荷鞍にすれて、處々破れて見苦しければ、眞間田の藤兵衛が妻に賴みて、縫ふて貰ひける。世に鬼などの諺、實に忝く思ひはべりて、

　誰か目にも付ん誠を女郎花

申の下刻雨あり、今朝からの殘暑を忘れ大に凌よく覺ゆ。

同　五日

曉猶ほ黎きに、中の湯に至り、のぼりて鹿の湯に浴し戻りて朝風すゞしく心地勝れてよし。

　薄吹く風や靜な朝ごゝろ

けふも道者のむれ〳〵て立ち下りぬ。
當處の溫泉は名湯なりと、豫て聞き侍り、相撲番附にも關脇に出たるからには、溫泉は効あるに極まれり。おのれ一週浴しぬるに、顏頰のあたり引はるが如く覺え、聊か逆上の氣味あり。但表の川音晝夜耳につき、

醉漢のわめき廻る實にうるさしとおもひ侍れば、翌日は本國へ戻らんと、さいつ頃より二階を下り一處に臥たる那珂西の一木彌介とも咄し物しける。眞間田の藤兵衞は、せめて猶ほ十日ばかりも浴したきよし、頻りにいひ物しけれど、妻は是非おのれと一處に立つべきよし、夫とあらそひ、終に藤兵衞、妻の口につきぬ。されどおのれと一木は、黑羽へ下らんと思ひ、眞間田の夫婦は太田原へ下るよし、暫の内も一つ宿に居侍りければ、久しき馴染の如く、互に別を惜しみ侍る。殊に藤兵衞は見かけにちがひ親切のやさしき男なり。

下野の國は、山々の形我が本國などゝは替りて、なだらかならず、總じて嶮山なり、畫にかける山水の如く、巖石のみ多くして、獅子の狂ふが如くなるあれば、牛の臥たるが如きあり寒國はかゝる鋭き天然の理なるよし、さもあるべし。

岩はふて高根のぼる蔦葛紅葉

那須岳山は頂き岩のみにして、高きと雲を貫き、兜を冠りたるが如く、硫黃に燒たるにや、八合目より木の類一本も見えず、いかなる姿にや、行者もこのお山の事咄さゞる法のよし。魔所なれば、深夜大木の倒るゝ如き音など度々なるよし。わが本國にてさへ、かゝる事は間々あるなれば、この高山に於ては、不思議とするに足らず。

同　六日

今朝は殊に出立と定め置きぬる故、一木と倶に寅の刻過より起き出で、當所の名殘温泉浴してんと、ある限の温泉を廻りぬ。

宿の支度もとゝのひ、朝餉たうへ、立支度なし侍るに、兼ては眞間田の夫婦も、別れ道迄倶にと約して侍れど、太田原が連出來て、いまだ支度のとゝのはざるにや、下り來ず、いつ迄またんも長き旅にしあれば、先にとて草鞋はきける比は、二階の藤左衞門、加倉井の男二

人、女二人、鳥山の三人も倶にて、眞間田の夫婦隙乞いとこまやかなり。

假初の別れも秋の深さかな

斯く詠じて人々に別れ那珂西も一木と倶に黒羽街道なる松子宿さして湯本を下りぬ、宿の主甚左衛門、そが悴富藏と宿外れの別れ道迄、荷物かたげて送りぬ。(下略)程なく馬も來たり、一木と諸ともに打乘り、黒羽にとて、二里の原道にさしかゝりぬ、これも又那須野の續きにて、眼の及ぶかぎり、皆草の道なり。されどこのごろは登山の旅人、温泉戻りの道伴多くして、道の程も寂しからず、さはれ照渡る秋の日の、いと暑く堪がたくて、前の宿にて桃の葉など貰ひ、膞に押あて、笠の下にさしはさみ、やう／＼と凌ぎ行くに、東北にあたつて、雲起り雷鳴あり、三十丁が外の山根は、雨も頻りに降ぬる氣色にて、此方も如何があらんと思ふ時、雷はいよ／＼烈しく、電光と倶に、一聲天地も崩るゝばかりに鳴りはためき、此折雨は一粒も降らず、雲きれのあればいよゝ恐ろしと思ふに、おのれが乘たる馬は、雷を恐るゝの氣像にて、忽ちにおどり上りて、十間あまり駈出しぬ。此あたり駄馬なれば、尻掛とて二疋つなぎに引あるけば、後に隨ひたる一木も、倶に走りて危きと限りなし。されど幸にして恙なく、又もやと恐るゝ內、ます／＼はげしくして、商人めきたるおのこ六七人が程、おのれよりさきに立ち行けるを追ぬき、馬いそがせて引かせけるに、兎角に雷の止まざれば、馬の驚きて駈めぐれば、馬士も汗押拭ぐひ、骨折て行けど、あまりに浮雲ければ、おのれつく／＼思惟するに、仕官の身こそ實に大切のものなれ、いらざる腕だてして怪我にてもし侍らば、生涯の不覺なり、落馬せざるを幸ひに下馬して後を顧みれば、餘の旅人も殘とりなく下馬し侍りぬ。遙かに遠き方より戻りたるに乘り來りける馬士一人、この雷に驚きて馬のはね

上るよとみえしが、忽ち落馬し侍り、怪我もせざるやうすなれど實に危し。前車の覆がへるといへるはかゝる事ぞかし。是迄雨はいまだ野までは來らざれど、追くる雲もかゝり侍れば、必濡れなんとおもへる物から、おのれに續けといひ捨て、大凡五十丁の外、さきに急げる旅人に追ぬき。未の下りに黑羽にはしり着きぬ。おのれありがたくも君の御惠みにて、那須の溫泉に浴しぬる故かや、五體すこしも疲るゝ事なく、連れの一木も、實に達者なりと感じぬるもをかし。去かしかゝる折にこそ、日來の勇氣を出しぬる時ならめと、益々精神を勵まし疾風の如くにしりけれど、足の痛み草臥を覺えず、黑羽の町なる濱田屋忠兵衛が亭に止宿なし、草鞋ときけるころ、雨はさら〳〵と來りけれど、雷は追々にしづまり、心地大いに落着きぬ、後に殘りたる旅人はかならず濡れたるとあらんと一木諸共かたりぬ。

秋風や笠に碎るいなひかり

稻妻やちきれ〳〵の山の雲

ごろ〳〵と鳴るいかづちに驚きて
　ごろり〳〵とこける旅人

草の花ふくるゝ野邊をはしりゆけば
　たのかたもとも風にふくるゝ

（下略）

子守唄

一葉庵主人

軍歌唱歌世に行はれて少年子女の敎育を助くる事少なからず去れど我國子守唄として未だ世に唄はるゝもの誠に少し其調に至りても音樂家を以て任ずる人々は宜敷等閑に附せずして硏究ありたきものなりと思ふなれど先づ夫故に余は茲に曲譜に關せず唄ひ得べしと思はるゝ單調のもの貳節を成し殊に敎育家の注意を促す健全なる國民をつくらんと欲せば搖籃に於てせざるべからずとは吾人が常に口にする所の警語にあらずや

春の野

あれ〳〵彼處に揚雲雀。　あれ〳〵此方に飛ぶ蝶々。
麥は穗に立つ波をうつ。　菜には黃金の花か咲く。

寝て居る牛の尻尾が。　邪魔だと蒲英公がふくれゝば。
お臀が痛いと泣く菫。　頭振ふるなよなアふるな。
泣くと鶯に笑はれる。　鶯に泣くと笑はれる。

春の海

舩は出る舩かへる舩。　煙の立つのが蒸滊舩。
帆かけて走るは帆前舩。　舩には何が乗せてある。
鞠に羽子板羽子の兒。　凧に雙六歌加留太。
太皷に竹馬風車。　夫がほしさに鯛の子が。
波から頭を出したれば。　鴎に頭をつゝかれた。

家政

肉類

K　K

立春も既に過ぎたれど、寒過ぎての寒と諺にもいふ如く、これよりの寒はまた一しほなれば、毎日の食事にも躰を温むる魚鳥獸の如き食物を用ふること肝要ならめ、就ては肉の擇方、殊に此頃の如き物價騰貴の節、動もすれば古き肉を混ずるの虞なきにあらねば、よく注意すべき點を知りて擇むべき事なり。

牛肉は膚理あらく指にて壓せば凹込み、鮮紅色にして、脂眞白き肉ならば大丈夫なり。肉の古きは色紫かゝり、脂黄色を帶ぶ。

豕肉の新らしきは、つまみねぢるときは直ちにねぢ切れ、皮を指にておせば凹込み、脂白く軟かなり。また皮の薄きをよしとす。

鷄の新らしく若きは、皮うすく軟らかく、足の節ゝのかたからず、眼きらきらするものなり。鳥の老若を知るには、胸骨を壓しみれば、若きものは凹込むなり。

其他鴨雉等を擇むにも、矢張足の先のやはらかく、眼の生ゝしたるをよしとす。いふまでもなき事なれど、鳥などを殺すに、頭を刎ねて倒につりさげ、すつかり出血さすれば肉美しくなるべし。

魚は鱗美しく鰭しやちこばり、肉堅く鰓紅く、眼きらめきて、高く出てたるをよしとす。少し古くなれば、

肉軟かく鰭まがり、鱗總黒み、眼凹むものなり。

くじら及山くじら

獸肉の内寒中の食用にして最も躰を温むるは猪肉を第一とす。されば猪肉の料理法は、さま〴〵ありて人のよく知る處なれども、念の爲め其一を擧ぐれば、先づ肉を生水より入れ砂糖を加減して凡そ一時間も煮立て、豫め拵へ置きし、大根、にんじん、牛蒡、蒟蒻、燒豆腐、芋（芋は揚煮たるを用ゆべし）等の具を入れ、煮立ちたるところにて、味噌煮ならばよく擦りたる味噌を入れてとかすべし。甘煮ならば醬油を加減よく入るべし。くじらは先づ可成薄く切りて糟に塗らし、煮立ちたる湯を二度も注き、冷水によく洗ひ、料理に用ふるまで清水に浸しをくべし。露にするには甘しく露を拵へ置きて入るべし。汁にするも煮立たる處にて入るべし。

衞生雜話

冷水浴にて皮膚を摩擦すれば、風邪にかゝると少なきは人皆熟知することなるが、此皮膚を摩擦するの効は實に著しきものにて、有名なる科學者ジョンソンの話に、豕は人間に等しき皮膚を有するものなれば、試に九頭を飼ひ、其中の六頭を毎日梳櫛もて梳りしに、七週の後、其の六頭は三十三ポンドの掛目をまし、食物は他の三頭に比して却て五ブッセルほど少なかりしと。總て皮膚を摩擦して、清淨にし、氣孔をあけ、血液の循環をよくすれば、豕に於けるが如く、人間も或統系によれば一年に、三十一ドルほど食物の經濟を來すといふ。

前號の早起に於て、日光の大切なる事は既に記したるが、日光の身躰に及ぼす影響は非常なるものにて、露西亞政府の雇ゼームス井イリイ氏の話に、兵營に於て

日當りのよき營處よりも、日影の方病者多くして。又有名なる佛蘭西の外科醫チビユイ、ツレーン氏の話に、誰の手にかゝりても癒えざりし何病とも分けがたき婦人の患者を、日當りよき部屋に移しゝに、速に全癒したりと。ナイチンゲール女史の話に、病人にとりて最も大切なるは、第一新鮮なる空氣、第二日光なりと。コレラ流行のときに於ても、日影の町に死人多きは事實にして、多くの醫者の説に、產後暗き部屋の中にとぢこもる產婦よりも、日光にある產婦の早く元氣つくといふ。

醫者の話に、年あけてより二三ヶ月の間が、チブス肺炎等の病人至て多くして、死者多しと。是等のもとは一寸した感冒等より起るものにて、もしかねて腸あしきものならば、チブスになり、或は咽喉より肺に及び、肺炎となる事あり。されば老人小供のある家庭にては別して衞生を注意すべきなりと、或醫者は語られき。

名家遺訓

（肥前の蘇民生と呼ぶ人より寄せ來る掲けて讀者に示し且つ同氏の好意を謝す）

鍋島加賀守直茂公遺訓

（一）利發は分別の花花さき實成さる類ひ多し

（二）諸藝は獨達し難し分別を加へさる時は却つて身の難となる事多分なり

（三）已下の心を能はかり其旨を以て上に至つて校量し候はゝ迦れ有りがたくそろ

（四）憲法は下輩の批判道理の外に理あり

（五）下輩の言葉は助けて聞け金は土の中に有と分明

（六）子孫の祈禱は先祖の祭也

（七）先祖の善惡は子孫の請取り手次第

（八）信心は心の掃除人の心を破らさる樣に祈禱は花

の離そ

（九）身上の塵は升階上るやうに

（十）人間の一生は若きに極る一座の人に厭れざるやうに

（十一）理非を糺すものは人恥おちるなり

（十二）大事の思案は輕くすべし

（十三）諸事堪忍之事

（十四）諸事人より先に計るべし

（十五）神物書道迦れ候事

（十六）鬮占は運につき候間差立用ひ候はゞ大に迦れ有へし

（十七）萬事したるき事十に七つ悪し

（十八）軍は敵の案に不入樣に覺悟すべし透間を計る時は勝利必定

（十九）武篇は卒忽そ不斷有へからす

（二十）上下によらず一度身命を不捨者には不恥そろ

（廿一）人は下程骨折候事能知るべし

（右は鍋島藩祖加賀守直茂公の訓戒にして鍋島藩此生命となり傳來せしもの也）

石田一鼎翁奉公人之故實

一　主人は無理な者下人は無理な者

一　傍輩は主君之用人我は其手傳

一　苦勞は身の樂み自由は心の虫

一　人間は堪忍々々は願力

一　ならぬ事とてうち置な成事とて油斷すな

一　心は身持から直る身は心持から直る

一　馴れは癖になる癖は馴れは直る

一　善きまねは眞似ぬか恥悪きまねはまぬるか恥

一　利を好むは商人義を好むは士

一　好ぬ事に理をつけよ好之道に用心せよ

一　辛苦しても氣はへらぬ心から氣は減る

一　當介は分別の曲尺同し事に分別は入る

一 志に時宜はなし所作は人に譲れ
一 躾知らて物するな機嫌斗らで物いふな
一 稽古の寄合は亭主になれ雑談の寄合は客になれ
一 人を欺くは身を欺くされことに志は見ゆる
一 口からは云はぬが口から手柄は誇らぬが手柄
一 聞た事は違ふもの見た事は時による
一 推量は推して捨よ云ところはいふて捨てよ
一 だまされてはだまれうかされてはうくな
一 遊山は人にすゝめられ役義は人をすゝめよ
一 酒に酔ては早く臥せ腹の立ては延引せよ
一 追従嫌へは無禮になる埒明たかれは遁れかある
一 此方か肝煎は人も肝煎
一 異見は言手内證は聞手
一 譏らるゝは譽らるゝ譽らるゝはそしらるゝ
一 述懐は身頼遺恨は人頼
一 人を使ふものは人に使はるゝ人に使はるゝ者は人を使ふ
一 物覺は物忘れ物忘れは物覺
一 智慧を捨ぬを愚痴と云ひ愚痴を捨ぬを智慧と云ふ
一 知らぬ事に大事は有知た事にけがは有る
一 士の意地は士がしる信心の德は信心の者が知
一 世間は能き方に付修行は悪き方に付
一 詮もなき事に詮がある用もなき物が用に立
一 迷は悟に迷ふ悟は迷を悟る
一 偏氣は天爵情識は人爵

(石田一鼎翁も亦佐賀の人神儒佛の三道に精通したる人なり氏の著書皆な實踐躬行訓戒的ならさるはなし)

小兒の涙

しばのや

小兒の眼中に少さき銀の如き露の湛ゆるを見ては其頭

を柔和に撫でつゝ何が爲めに泣くやとて其痛苦の原因を問ひ同情を表するの人ならでは此地球上にて自愛と頑强に屬するの事業を爲すに足るの人なりとは信ぜられず實に小兒の眼は温和なる春の日に於けるが如く又魔鏡の如く人心を柔和にし快活にするものなれば之に哀みの涙のあれば此心を濁し此鏡を曇らすものにて哀痛のなきに之を濁し曇らすは必竟するに人性の罪人なれ小兒の哀み痛みてあるを知らば之を慰籍し涙のあるを見れば之に同情を示すべしとは云へ餘りに心を柔弱にするも亦宜しからず抑も眼中の涙は神聖なるものにして恰も樹脂は深く木の神髓に達するの瘡を得るにあらされば流れ出でざるが如くあるべきものにて聊かの事にても直ちに頬上に流れ落つるの涙は貴重なる眞の「ダイヤモンド」にはあらで僞造なれば見る人とても之を卑しめむ眞の哀痛の爲めに流るゝの涙は云ひ過ぎるかは知らねど眼の装飾ともあれば鳥渡したる事の爲めにも直ぐに流れ出る容易なる涙は見るもいやらしき者なり然るに世には何故にか此僞造眞珠を出す人の多きや涙もろき人を「水邊に住居する」とて謗り又「熱涙は、かわくも早し」と云へる西諺もあれど今日の如き時勢には鐡の如き心、强壯なる躰の男女を要する事なれば室内にて太郎が柱の角に頭を當てゝ泣き叫ぶあれば、母は心配して其方に疾く走り行きて「何をした」とて、いたわり尋ね頭に瘤にても生しあれば水にて臨時の手當を爲し「何故泣くの、此樣に大きくなつて（二尺にも達せねど）泣くなんて、可笑ではないか、さー、もー泣ずに母ちやんの樣に御笑ひと叱して母が笑へば小兒も急に氣を變へ眼よりは尙ほ涙の流れ落つるあるも小さきぱつちやり、とした愛苦しき丸顔に既に笑ひを漲らするは大雨の後ちにまはゆき日光が雲間より輝かんとするにや比せん實に伶俐なる母は此位の心得こそ望ましけれ然るに多くは小兒の泣くを見れば「おーお

ー、可愛想に如何したの御つむを打た、おー、可愛想にねへ何處か痛みの、おやまア、大きな瘤が出來たよ大變だねへお三や早く御醫者へ行て御出で」なぞと甘やかせば太郎は三十分も、わい〳〵と大聲擧げて泣くは決して珍敷からぬ事にて、必竟母が小兒の涙を壓搾するなり

學校へ行きし次郎は歸途にて、いたづらな學友より雪塊を背上に一つ見舞はるゝと痛を感ずるか感せぬに、もー泣き始め兎の如く逃げて室内に轉げ込むと母は之を見て早や自分も涙を一杯にして「如何したの、何に、三郎さんが雪を投げた、いゝよ、明日は先生に云ひ付けて叱責して頂くから、又歸りにはお三を迎ひに遣るから安心しておいで杯と云へど母は「男の癖何事だよ、其樣なつまらぬ事に泣くと人が笑ひますよ」と云ふこそ適當なれ

二月の盆栽

此頃は金柑、橙、蜜柑共に觀賞に宜し寒暖晝夜懸隔せざる場所を好むが故に澆水の凍らぬ限りは清冷なる場所に置くも差支なし、佛手柑は熟實の脱落する時節なれば殘實を取り去り樹勢を培養するに如かず

楓、藤、柿、櫻、林檎、柳等の植替に宜し、又榧、松、桃、李、藤、葡萄接木に適す、垣根の修理又は結替は此頃を第一とす

社交一斑

流行の栞

流行子

道行形婦人外套

從來婦人の外套なるものは、肩掛にてありしが、今は全く癈れたり、否全く癈れたるにあらず、お高祖頭巾に肩掛の形といふは澤山見受くるものなれども、已に流行遲れとなりぬ、これは是迄貯へあるから着用するものにて新に肩掛を購求するといふ人は尠くなりぬ、而して肩掛の位地を奪ひ、目下の大流行は言ふまでもなく道行形婦人外套にして、交際社會に出るものは必らず之を纏ふ、其色合は淡茶、若しくは濃茶若

しくは黒にして地は斜綾羅紗一番多く、紺又は黒の綾セル地も見受けらる、此流行の起原は花柳社會なりしが、今は一般に蔓延し、頭巾に肩掛姿を棚の達摩さんや、ほうづきの亡魂などゝ笑へど平民的は肩掛にあり、道行形が肩掛に優るといふは體裁の瀟洒なると便利なるとにあれど、價は遙に肩掛よりも貴し

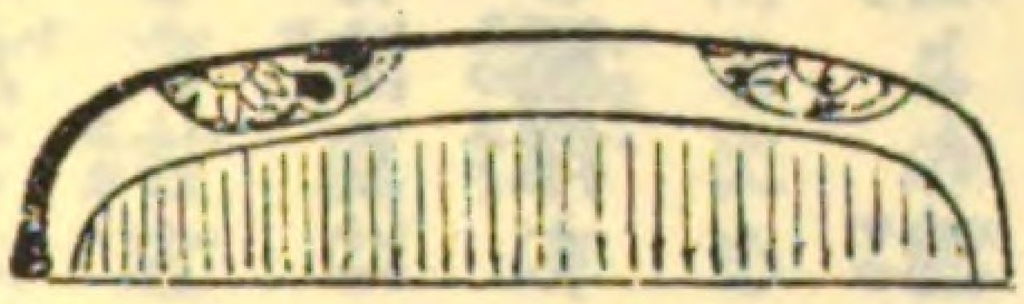
新形の髪具

此頃は世間の好景氣なるが故、在來の品がドシ／＼賣行あるために其道々の商估は其品のみの販賣に忙しければ職人も亦在來の品のみに手を着け居れば、新形新工夫ものを考ゆる暇なしといふ勢なれば、流行品の世間に顯はるゝも極めて尠し、茲に髪具につき新形とも申すべき品々を列記すべし



丸びん形雪月花模様の差櫛は形は從來の通りにて齒は棧なれど此新意匠ははし一が雪月花の色紙塗にあり(價五十五錢)

つま形夫婦模様は裏表模様を異にし古代蒔などを置きたるが、本品の賞すべき所は滋味ある所にあり(價四十五錢)



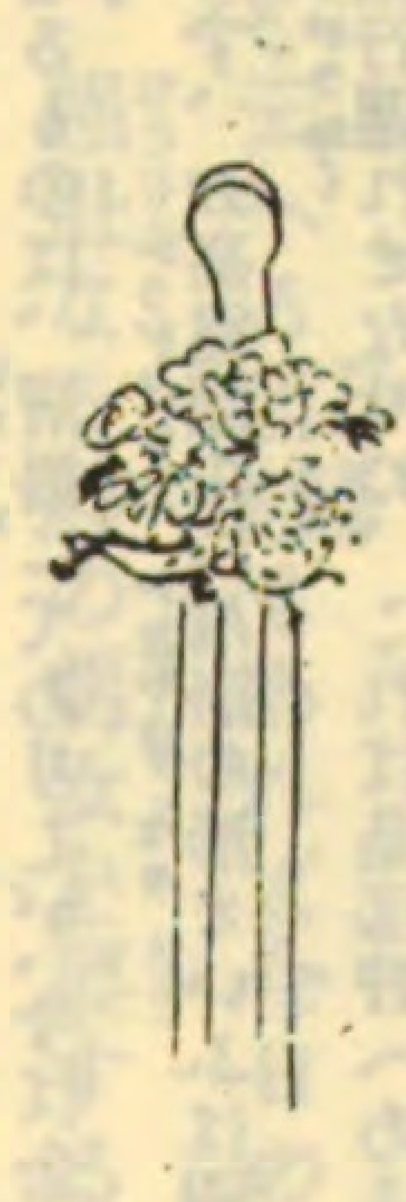
鐵刀木の櫛弁、これは實に稀らしき新形にして、櫛の形は政子形なれど、



生地の面白きより意氣な社會に向く流行品なり、



禮式用の花簪は從來脚と共に鼈甲に限りたれど、今年より金屬製の挿込流行し始めたり、挿圖に示せるは信久作の牡丹と菊の金屬彫物なり、



これより追々金屬製の挿込流行するに至るべし、

松竹梅意匠の前挿は眞に可憐に出來たるものなり、松葉を脚にしたる意匠は從來珍らしきにあられど、竹筒に梅一枝を活けたる松竹梅の取合せ面白し、梅花は象牙製にして他は悉く鹿角製なり、價(三十錢)も高からねば進物用などに向くべし、



女夫ふさは圖に示す通り、紺の細紐を閉ぢ合せたるもの、色は白と藤紫、若しくは白と緋第一の流行(以上尾張町白牡丹本舗報)

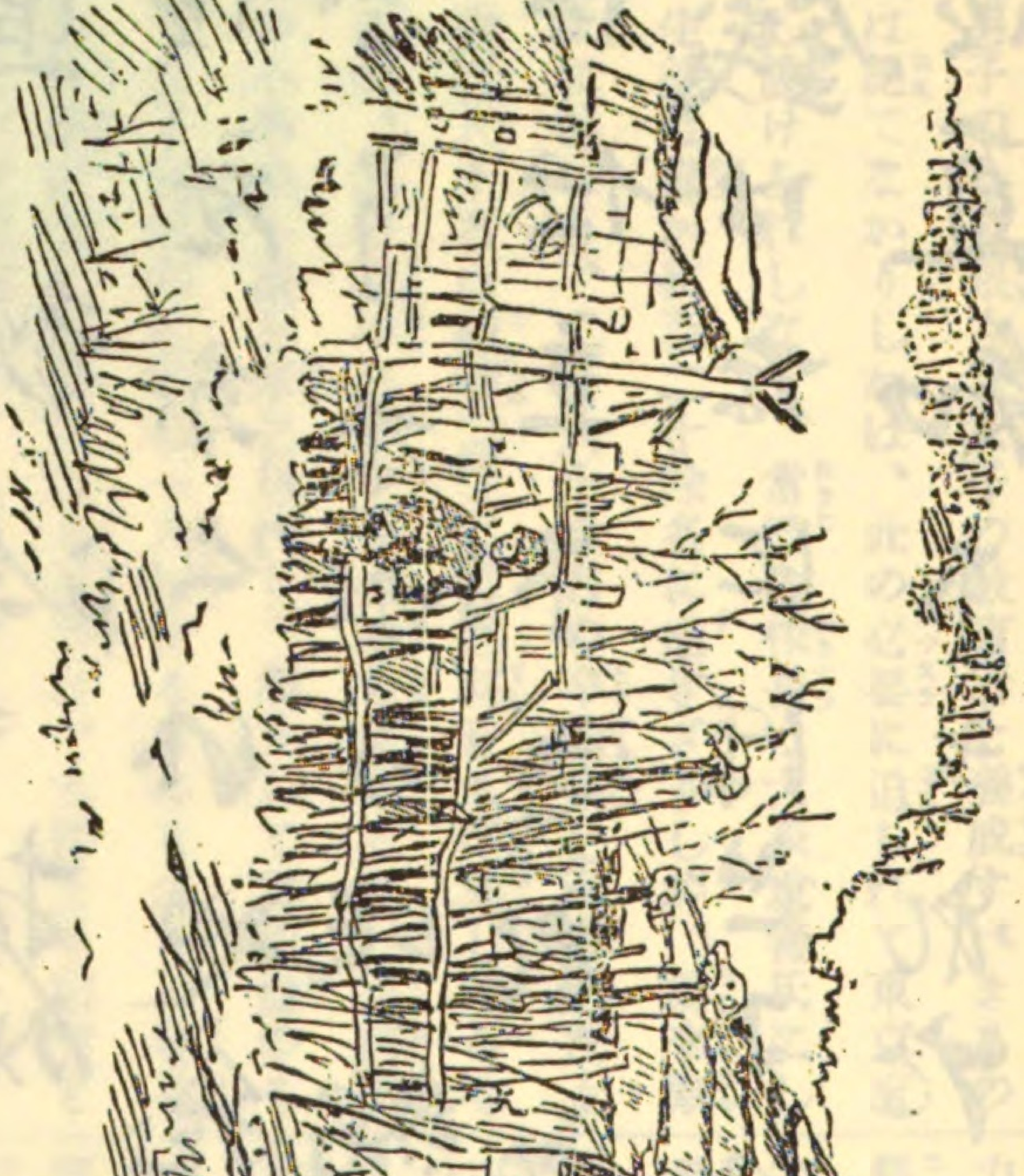


雁料理

此頃は鳥類料理口に適する候なり、其内雁の料理は格別の趣あり吸物にしても鍋やきにしてもよし、吸物の取合は獨活、若ふき、岩たけ、木茸、しめぢの類、大葱を五分に刻みて鍋やきにするは上野山下雁鍋の料理なり

雜録

北海道土人の家住と少女の筆蹟



圖に示せるは北海道土人の住家なり、籬の尖頭にある髑髏は熊の頭にして土人寶物の随一なりといふ。

次に示すものは「アイヌ」の一少女則はち釧路國春取村の小學校の女生徒志富キヤ(十四歳)の文章と筆蹟なり

追々秋冷に相成候處御変り
御座なく候や然れば御めん
どうながら綿入廿日迄に
御仕立下され度又其ちん
銭はなにほどに候やちよつと
御通知下されたく候
志冨　まや

東京府下の女學校（五）

東京府高等女學校

◉位置　府の東南端なる築地、海に近き所にあり。京橋區南小田原四丁目八番地なり。

◉校舍　外見は甚だ狹隘醜穢なるが如きも、内部は善く整頓せるものゝ如し。

◉主義及び目的　目的は女子に高等なる普通敎育を授くると、婦人敎育者を養成し、小學校正敎員任用に適する資格を養ふと、及び女子高等師範學校へ入學せんとするものゝ豫備敎育とに在り。主義とては別に確定

せるものなしと雖ども、文部省が從來執り來りし方針に從ひ、國家主義てふ大綱の下に、國粹をも保存し、外國の精をも容れ、以て圓滑なる敎育を授けつゝあり。

◉歴史　明治廿一年十二月始めて設立の企圖を定め、翌廿二年四月開校の式を擧げぬ。當時尋常師範學校は唯だ男子のみに限り、女子の敎育者を養成すべきものとては絶てなかりしかば、此の必要に迫られて東京府立とし設けられしなり。當時の校長は大束重善氏にして、生徒は僅かに百二十餘名に過ぎざりしが、爾來漸く盛大に赴むき、二百六十餘名の卒業生を出だしたりき。內百八十名は補習(即ち師範)科をも卒業したるものなるが、其の過半は府下及び地方に在りて、各尋常高等の小學校へ職を奉じ居れり。而うして其の他のものにて女子高等師範學校へ入校するものも多く、每年同校の入學試驗に許可さるゝ過半は、本校より出づといふ。目下在校生は二百餘名なり。

◉風儀　質素清儉を旨とし、衣服の如きは特に注意せるものゝ如し。

◉學課　學科を大別して本科、補修科の二つとす。

◉本科は修業年限四年にして、普通中等の敎育を授くるものなり。入學者の資格は高等小學三年級以上の學力ありて、滿十三年以上なるを要す。學科は修身、國語、英語、歴史、地理、數學、理科、家政、裁縫、習字、圖畫、音樂、體操、敎育、漢文にして、其の敎科書として用ふるものを擧くれば漢文には漢文軌範なるものを採り、英語はスウィントンの讀本より始まり第四年級に至て文部省英語讀本第四を採用せり。然れども主として意を注けるは會話にありと云ふ。國語には方丈記、宇治拾遺物語、徒然草、土佐日記、増鏡等あり。數學は普通算術と上級に至て幾何學の初歩あり。家政には家計簿記、家事衛生育見法等あり。

◉補習科は即ち將來小學敎員たる資格を得んための準備

をなすものにして、本科を卒業せしものを入れ、主として教育學を授く、修業期間は六ヶ月なり

◎費用　入學料は壹圓なり。毎月の授業料は本科一年級壹圓、二年級以上は壹圓五拾錢にして、補習科は二圓なり。

本校は東京府のために設立せられたるものなればにや、別に寄宿舍なるものなく寄宿生なし。故に現今地方より入學せるものは、多く其の親族知人等の家より通學なし居れり。費用は一ヶ月凡そ六七圓もあらば、以て不便なく支ふるを得べし。

◎校長及ひ職員　校長は府の參事官たる谷口富五郎氏にして、職員は男女高等師範學校の卒業生等凡そ十餘名あり。

因に記す府下女學校中の巨擘たる明治女學校は去五日午前二時二十五分祝融の禍に罹りぬ

臥龍梅（口繪のごとき）

臥龍梅は東京府下南葛飾郡龜井戸村梅屋敷(清香庵)にあり、其形龍の臥したるに似たるを以て此名あり枝幹蟠屈して園中他の數百株の中に嶄然別類を爲す、花は重瓣にして雪白、清香馥郁たり春至れは都人遠きを辭せす此梅に筇を曳くもの陸續たり

歌苑

新年梅　（君　枝）
あら玉のとしのはしめのかさしにさにほひや出しにはの梅か枝

元日　（同　人）
ゆたかなる御代につゝめる嬉しさのなほあまりある千代のはつはる

竹雪　（同　人）
吹きはらふ風も雪にやうもるらんすかきのたけのしたなれのこゑ

をしへ子に示さんとて　（同　人）
いはくたくあらいそ浪もそのもとはみやまの苔のしつくなりけり

春　山二首　（水田みづほ）
松さへも緑ますらむ山のいろをへだつるものは霞なりけり
さきはなる杵の色さへまさりゆく春の山辺にいさやまじらむ

春月　（同　人）

はなゆゑにそこさもしらすさめくれば月ぞ梢ににほひそへける

春　風　（同　人）

冬ごもり春まちかねるこゝろなば花よりさきにさそふ風かな

春川水　（同　人）

ふくはるかぜに氷さけ　綠にかへる里川の
水のまに〳〵舟こぎて　花さく岸を尋れてむ

都路の雪　（同　人）

かきわくるわだちのあさもはやきねてつもるも志ろし都路のゆき

寄山祝　（美作　高田　美則）

君が代は千代に八千代に足引の山の姿さかはらさりけり

仝　今　様　（同　人）

千代に八千代にかはりなき、常盤木おふる足引の、山の姿はあきらけく、治まる御代のためし也

初聞鶯　（同　人）

朝日影さすかに春の心地して初音うれしき庭の鶯

野若菜　（同　人）

春あさみ淺澤小野は雪ふかしかきわけて秋若菜あさらめ

田家梅　（同　人）

みやびをのさびこぬ里も時なれやほころびそむる梅の初花

紀元節　（同　人）

高千穗のその名も高く千萬にあふぐけふこそたふさかりけれ

立春霞　（浪速　煥　乎　生）

ほの〳〵さ明行空に春かすみ海山かけてたなひきにけり

殘　雪　（同　人）

こゝかしこ垣れのかげにめつらしく氷りてのこる去年の白ゆき

鶯　（同　人）

鶯の聲もかなりて聞ゆなりわか宿ちかき梅のはやしに

柳　（同　人）

里川の川そひやなき春風に下ゆく水も打なひきつゝ

親にわかれて　（同　人）

たらちれの親にわかれて行けさはたのしき旅も立ちうかりけり

新年二首　（岐　川　流　夫）

千早ふる神代ながらの初空は外つ國人のあふぎやはする
乙女らが袖ふりかへしつく羽子は千代萬代さひびきわたらむ

家庭雜誌を讀む　（同　人）

山がつのをりたく柴のゐろりべにまたるゝものは此みふみなり

田舍の景　（同　人）

をちこちにこぼめき立つる唐うすの音もたのしく聞ねけるかな

墨田川の都鳥　（同　人）

むかし人何時かくあらむさ思はずも今はまこさの都鳥なり

若菜草　（松　田　た　け　子）

いさ野邊に行きても見なん春風のさそふあたりは若菜もゆめり

早春鶯二首　（同　人）

今朝こそは梅さきつらん鶯の鳴く聲たにもかむばしきかな
得も云はなく聲そ聞く鶯の今朝おさつれて梅やさくらん

探　梅　（同　人）

心あてにたすれて見なん鶯のなきつる方に梅やさくめり

初春待花　（京都　澤田　梅松）

いたつらに今日も暮しつ春の日のなが〳〵しくもたも花そ待るゝ

水邊梅　（橫濱　松　筠　生）

川そひの梅の盛になりしより下ゆく水も香に匂ひつゝ

春　月　（同　人）

蛙なく門田の水にうつる見ゆ影おだやかな春の夜の月

蕨　（同　人）

けふもまた里のをさめ子うちむれて霞の山にわらびさるなり

友人の征臺中戰死を　（信州　小宮山豐治）

わが身はのへの烟と消へるとも譽はよゝになほのこるなり （同 人）

社頭庭鳥

夜神樂の音打やみて玉がきのあたりさやかに庭鳥ぞなく （同 人）

海邊霞

浦人の志ほくむ聲を春霞のとかになして立ち渡りけり （同 人）

雪中尋梅

分け來れは雪より外に色もなし梅の林や何方なるらむ （東京 村瀨のぶ子）

草漸春

夜へふりしたに垣根の三ツ葉草ふたばながらに靑み初めたり （同 人）

朧 月

さやかなる影よりも尙ゆか敷は霞の奥のおほろ夜の月 （同 人）

柿本人麿

さし昇る高角山の月影に言葉の花の色やそうらん （同 人）

硯

水くきの流れつきせぬみな本はすゞりの海の涙にさりけり （同 人）

春 月

靑柳のみさりのかみのくしのことまがひても見ゆ三日月のかげ （周防 三 好 生）

小兒のわづらひける折

豆太鼓うちみるけしきはかはられど乳房のはゝはいかゝなるらん （同、人）

比良の雪

白がれさまがふばかりに白ゆきの比良の高嶺につもりけるかな （近江葉山 岩本さみ子）

雪中梅花

ふりつもろゆきにもたえてさきにけりまがきのもとの白うめの花 （同 人）

旅中鶯

あまさかる鄙の長路のうき旅をなぐさめよとや鶯のなく （信濃 白 虎 生）

庭上松

世々をへて色も變らぬ庭の松これぞ千歲の君が友なる （同 人）

圍 碁

おのがじゝ心のうちにまけまじとうちぞ爭ふさまぞおかしき （同 人）

遠 情

月雪に花にむかしをしのばれてしたふ心ぞいやまさりぬる （同 人）

夢

世にまさぬ親に逢ふてぞ嬉しゝと思へばさむるうたゝれの夢 （同 人）

初 春

春風に池の氷も打とけてなみの花さへ咲初にけり （沼津 桃 蹊）

山家梅

去年の雪猶消やらぬ山里の軒端に志ろく匂ふ梅が香 （同 人）

富士山

千早ふる神代のまゝに今もなほ姿かはらぬ富士の芝山 （同 人）

早春雪

春さいへは花のおもかげ先見ねてそてにたまらぬあは雪そふる （下總 齋藤 民子）

朝 霞

雲もなくなきたる空日出る日のひかりもかすむ武藏野の原 （同 人）

夕 梅

わきて猶のさかにうつる影そひて夕日もにほふ梅の志た風 （同 人）

庭春雨

日にそひてみさりもまさる春雨の糸くりかはし庭の靑柳 （同 人）

海邊霞

かよひ路のこく舩もきねうせて霞めさしろ三保の松原 （羽後 日水志和子）

雪と幼兒

爲ちやんおあそびしまちようか？
ざッちり雪がふつたと！
爲ちやんおいでよこの雪で
ゆきんぼこちやねてあそびまちよう！
ヤー〳〵また〳〵ふッて來た
上は灰まき中ちどり
下は雪ふりおもちろい
ヤア〳〵まだ〳〵ふつてくる （あふみ葉山 岩もと 宮）

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

○定價

一冊	金五錢	地方郵税共 金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	地方郵税共 金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	地方郵税共 金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行